－千葉市－

都町山王遺跡
居寒台遺跡

２００３

千葉市教育委員会
財団法人千葉市教育振興財団

例　　言

1．本書は，千葉市の委託を受け，財団法人千葉市文化財調査協会が実施した都町山王遺跡，居寒台遺跡の埋蔵文化財調査報告書である。なお，文化財調査協会は平成14年３月31日をもって解散し，財団法人千葉市教育振興財団に業務を統合した。

2．本書に所収した遺跡の所在地・調査面積・調査期間・調査担当者は下記のとおりである。

①都町山王遺跡

（1）所　在　地　　千葉市中央区都町1085番２他

（2）調 査 面 積　　1,945㎡（確認・本調査）

（3）調 査 期 間　　平成13年５月16日～平成13年８月15日

（4）調査担当者　　古谷　渉

②居寒台遺跡

（1）所　在　地　　千葉市花見川区浪花町16-30他

（2）調 査 面 積　　確認調査400㎡／3,074㎡　本調査200㎡

（3）調 査 期 間　　平成13年11月１日～平成13年12月14日

（4）調査担当者　　中山貴正

3．整理作業及び本書の作成は白根義久が担当した。

4．遺構写真は発掘調査担当者が撮影し，遺物写真は整理担当者が撮影した。

5．第１図に掲載した地形図は国土地理院発行1/25,000地形図『千葉東部』，第20図は同じく『千葉西部』，第17図は明治15年測量第一軍管地方二万分一迅速図『千葉町』，第26図は明治15年測量第一軍管地方二万分一迅速図原図復刻版『千葉縣下總國千葉郡畑村』,『千葉縣下總國千葉郡馬加村』を使用した。

6．瀬戸窯製品については瀬戸市立埋蔵文化財センター藤澤良祐氏にご教示いただいた。

7．出土遺物及び調査記録は，すべて千葉市埋蔵文化財調査センターで収蔵保管している。

8．発掘調査の実施から報告者刊行に至るまで，下記の諸機関のご指導・ご協力を賜った。記して謝意を表したい。（順不同・敬称略）

千葉県教育庁生涯学習部文化財課，千葉市教育委員会生涯学習部文化課，千葉市建設局道路部道路建設課・街路建設課

凡　　例

1．本書中の挿図の縮尺は原則として以下のとおりであるが，各図中に縮尺を示してある。

竪穴状遺構・土坑・地下式坑：1/40，溝：1/200，区画：1/80，屋敷跡 1/160，竪穴住居跡・掘立柱建物跡：1/60，土器・陶磁器・石製品・金属製品：1/3，石器：1/3，2/3

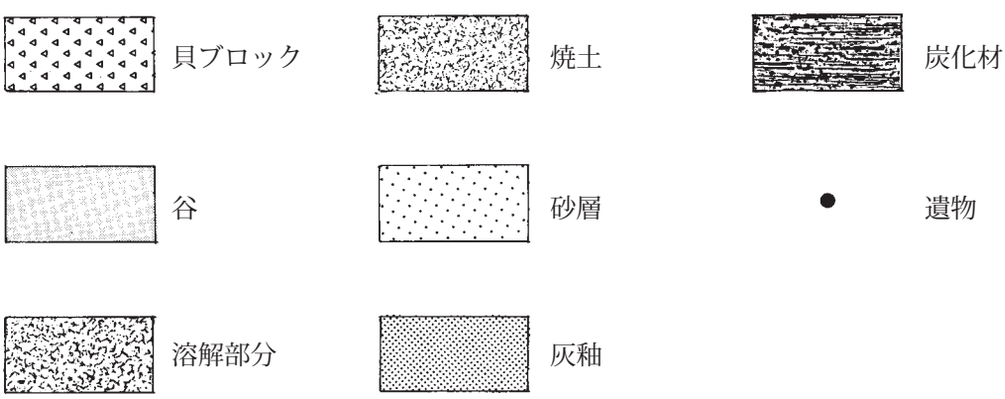
2．遺構の方位は，公共座標の北を基準としている。

３．土層，遺物の色調は農林水産省監修『新版標準土色帳』（1993年度版）を基準にしている。

４．都町山王遺跡の遺構番号は，発掘調査時には竪穴状遺構・土坑・地下式坑をＣ，溝をＤとしたが，整理時に付け替えて次表のようにした。

報告番号	調査時	報告番号	調査時	報告番号	調査時
１号竪穴状遺構	C-003	10 号土坑	C-018	１号区画	C-009
１号土坑	C-001	11 号土坑	C-019	ピット１	C-020
２号土坑	C-002	12 号土坑	C-021	ピット２	C-023
３号土坑	C-005	13 号土坑	C-022	ピット３	C-027
４号土坑	C-006	14 号土坑	C-024	１号溝	D-001
５号土坑	C-007	15 号土坑	C-026	２号溝	D-002
６号土坑	C-010	１号地下式坑	C-011	３号溝	D-003
７号土坑	C-013	２号地下式坑	C-015	４号溝	D-004
８号土坑	C-014	３号地下式坑	C-012	５号溝	D-005
９号土坑	C-017	４号地下式坑	C-016		

５．挿図中の記号・スクリーントーンは次のとおりである。



本　文　目　次

例言・凡例
目次
Ⅰ　都町山王遺跡
1　調査に至る経緯と調査の概要……1
2　遺跡の位置と環境……1
3　検出された遺構と遺物……4
⑴　竪穴状遺構……4
⑵　土坑……4
⑶　溝……4
⑷　区画……7
⑸　屋敷跡……7
⑹　出土遺物……16
4　まとめ……23
Ⅱ　居寒台遺跡
1　調査に至る経緯と調査の概要……28
2　遺跡の位置と環境……28
3　検出された遺構と遺物……31
⑴　竪穴住居跡……31
⑵　掘立柱建物跡……31
⑶　調査区出土遺物……31
4　まとめ……35
写真図版
報告書抄録

挿　図　目　次

第１図　都町山王遺跡の位置と周辺遺跡……２
第２図　都町山王遺跡地形図……２
第３図　都町山王遺跡遺構配置図……３
第４図　１号竪穴状遺構・１～５号土坑……５
第５図　１～４号溝……６
第６図　１号区画……８
第７図　屋敷跡……９
第８図　遺構配置図（既報告分）……10
第９図　１・２号地下式坑……11
第10図　３・４号地下式坑……12
第11図　６～11・15号土坑……14
第12図　12～14号土坑・ピット・
　　埋没谷土層断面図……15
第13図　出土遺物（中世）①……17
第14図　出土遺物（中世）②……18
第15図　出土遺物（中世）③……19
第16図　調査区出土遺物……22
第17図　中世関連地形図……24
第18図　都町山王遺跡周辺地形図……25
第19図　平成７年度・13年度遺構配置図……26
第20図　居寒台遺跡の位置と周辺遺跡……29
第21図　居寒台遺跡地形図……29
第22図　居寒台遺跡遺構配置図・
　　土層断面図……30
第23図　１号住居跡……32
第24図　１号住居跡・調査区出土遺物……33
第25図　１号掘立柱建物跡……34
第26図　居寒台遺跡周辺地形図①……37
第27図　居寒台遺跡遺構配置図……38
第28図　居寒台遺跡周辺地形図②……39

表　目　次

第１表　陶磁器観察表(1)……19
第２表　陶磁器観察表(2)……20
第３表　陶磁器観察表(3)……21
第４表　石製品観察表……21
第５表　石器観察表……22
第６表　中世遺物組成表……27
第７表　１号住居跡出土土器観察表……34

写真図版目次

図版１　都町山王遺跡遠景　都町山王遺跡近景　発掘作業状況①　発掘作業状況②　台地上完掘状況
　　１号竪穴状遺構　１号区画　遺物出土状況（第14図-34）
図版２　１号地下式坑　２号地下式坑　３号地下式坑　４号地下式坑　６号土坑遺物出土状況
　　６号土坑　８号土坑　15号土坑
図版３　都町山王遺跡出土遺物
図版４　居寒台遺跡近景　発掘作業状況①　発掘作業状況②　１号住居跡出土遺物①
　　１号住居跡出土遺物②　１号住居跡　１号掘立柱建物跡　土層堆積状況
図版５　居寒台遺跡１号住居跡出土遺物　調査区出土遺物

Ⅰ　都町山王遺跡

１　調査に至る経緯と調査の概要

市道都町140号線道路整備事業に伴い，千葉市長松井　旭より千葉市教育委員会教育長宛に千葉市中央区都町1085番他2,526㎡について「埋蔵文化財の所在の有無及びその取り扱いについて」の照会が平成10年10月５日付で提出された。西側隣接地は平成７年度に発掘調査が実施されており，照会地にも遺構の広がりが予想されるため，そのうち2,355㎡（概測）について「遺跡の所在する」旨の回答を平成10年11月26日付で行った。

協議の結果，1,945㎡について記録保存のための発掘調査を実施することとなり，市教育委員会の委託を受けた財団法人千葉市文化財調査協会が確認・本調査を実施することとなった。

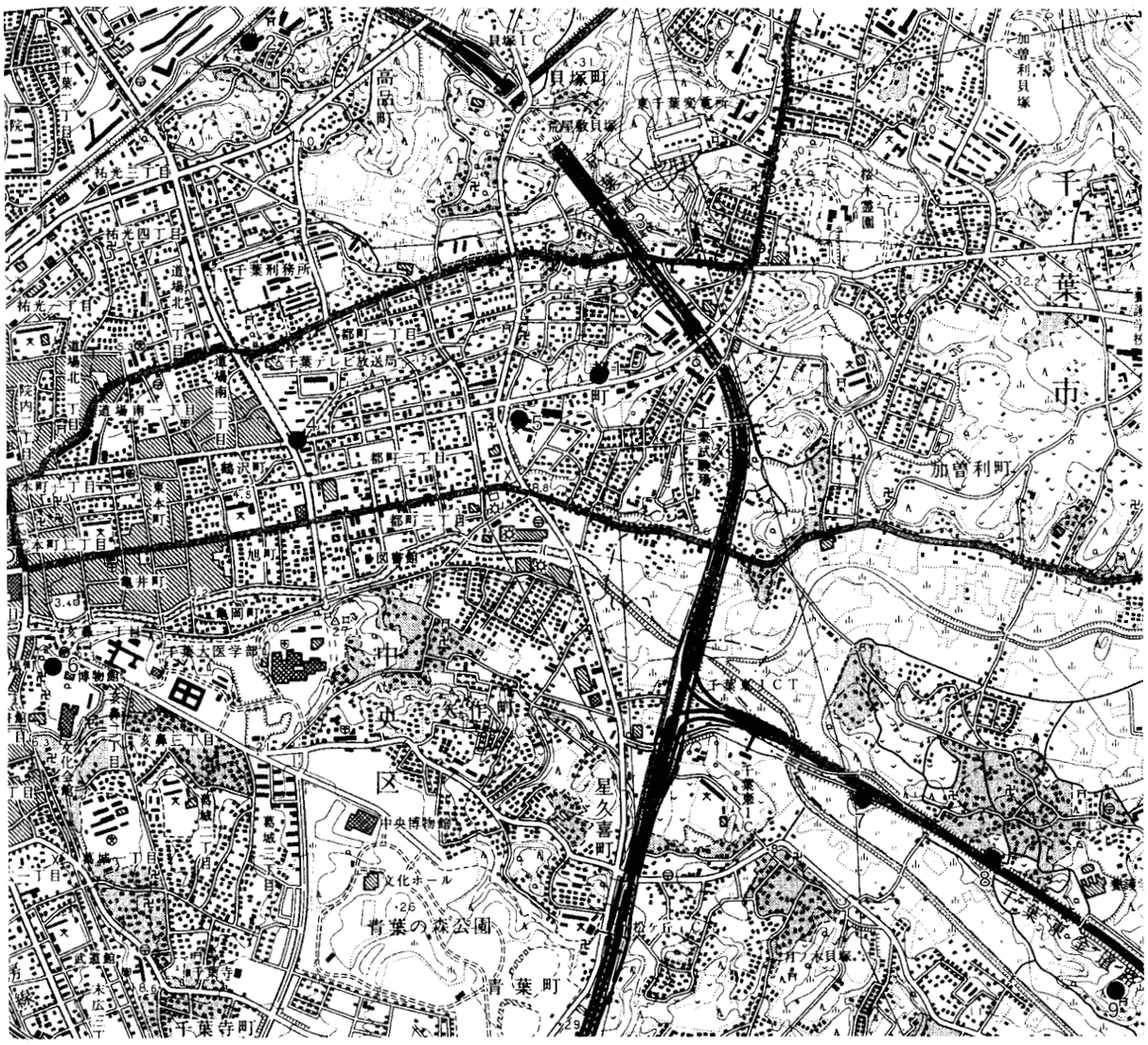
今回の調査では，調査区内に設置されているコンクリート杭を基準に東西にアルファベットのＡ～Ｇまで，北から南には算用数字の１～６まで振り，10ｍ毎のグリッドを設定した。さらに各グリッドを５ｍ四方の小グリッドに分割し，各々ａ～ｄを振り，北西杭を基準として「１Ａ－ａ」というふうに呼称し，それをもとに遺構実測・遺物取り上げを実施した。なお，整理段階で公共座標第Ⅸ系と図上で重合させた。（第３図）

２　遺跡の位置と環境

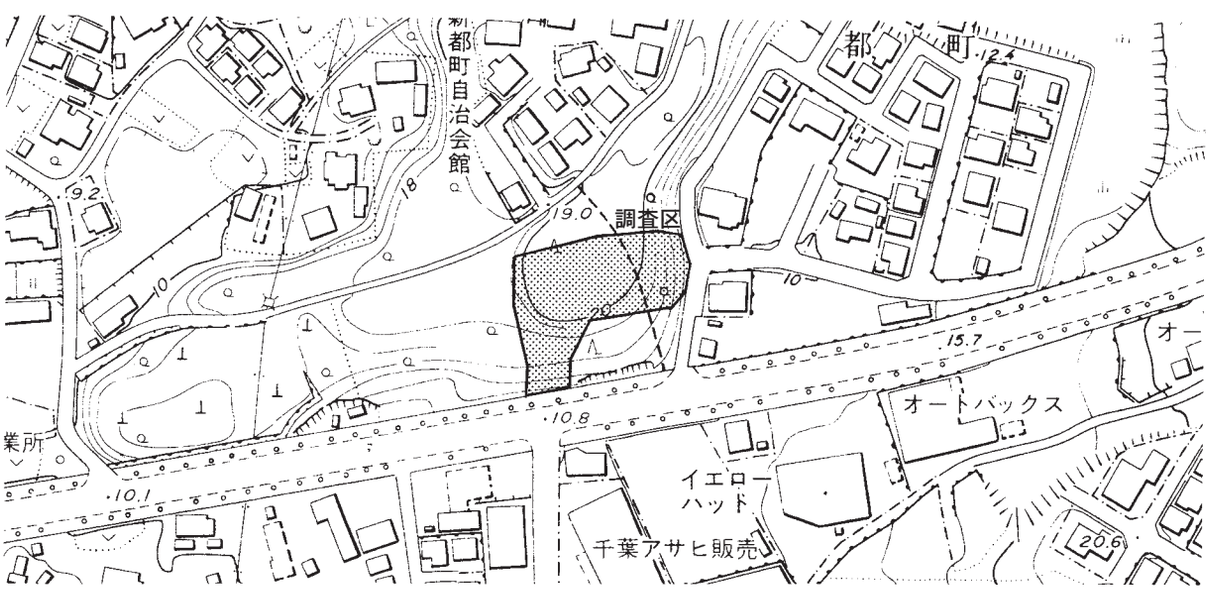
都町山王遺跡は千葉市の中央部，市内を東西に流れ東京湾に注ぐ都川の下流域に開口する支谷によって開析され，低地に細く突き出た台地上に位置する。標高約13～19ｍ，旧水田面との比高差は３～９ｍである。本遺跡は現在，東側の台地部分と一連のものとしてくくられているが，周辺の開発が進む以前の地形図（第18図）では，その間に小支谷が入り込んで台地を二分しており，今回の調査区は，本来は別の遺跡として扱うべきであろう。

周辺には，縄文時代では昭和21年の調査で早期末葉の貝層下の竪穴住居跡より２体の人骨が検出された向ノ台貝塚（第１図５），昭和43年に発掘調査が行われ，海岸線に貝塚が形成されたと考えられる前期後半を主体とする宝導寺台貝塚（同図４）が知られる。また，京葉道路建設に伴う発掘調査が行われた車坂遺跡（同図３）では，前期後半諸磯期の小竪穴と前期から後期にかけての遺物が出土し，兼坂遺跡（現在都町山王遺跡と統合）では，遺構は検出されていないが，中期から後期の遺物が出土している。弥生時代では，車坂遺跡で後期の住居跡１軒が検出されている。

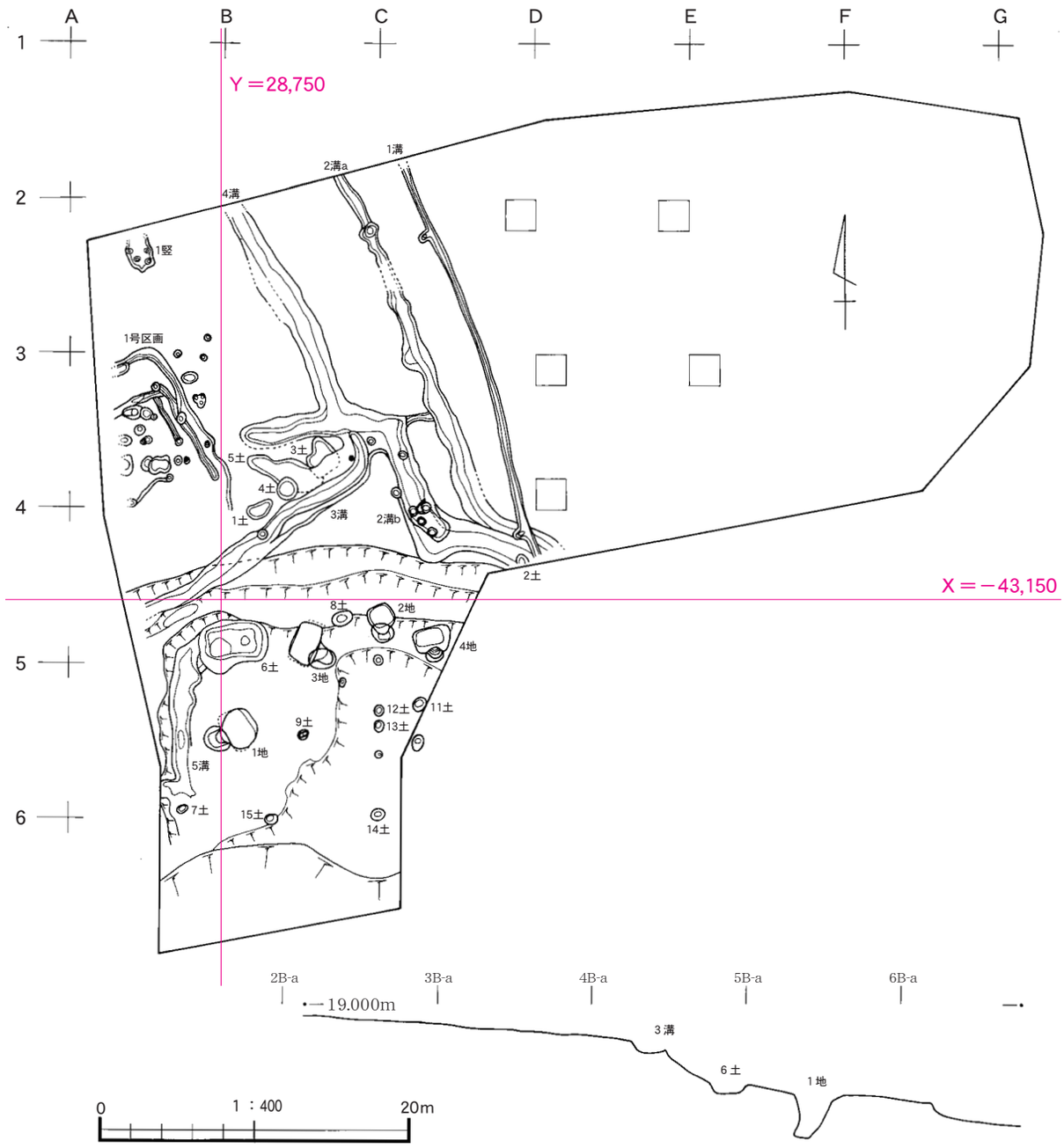
中世では，1126（大治元）年から 1455（享徳４）年まで千葉氏の本拠とされていたが，発掘調査により本格的に城郭化されたのは戦国期であることが明らかとなった猪鼻城跡（同図６），千葉氏の本拠が本佐倉城に移ったのちには千葉氏嫡子が元服の際，氏神である妙見宮に参詣するための中継地として利用されたことが知られる高品城跡（同図２），都川本流と支川都川によって形成された舌状台地には城の腰遺跡（同図７），城山城跡（同図９）といった城跡，15世紀代の墓地とされる西屋敷遺跡（同図８）が所在する。また，調査地点の北西側には真言宗豊山派西照山延命寺が所在し，字大境の水田より出土したという言い伝えがある鎌倉期の作とされる石造不動明王座像が安置される。



第１図　都町山王遺跡の位置と周辺遺跡（1/25,000 千葉東部）



第２図　都町山王遺跡地形図（1/2,500）



第３図　都町山王遺跡遺構配置図

3　検出された遺構と遺物

今回の調査では，屋敷跡１ヶ所，竪穴状遺構１基，地下式坑４基，土坑15基，溝５条，区画１ヶ所を検出した。15世紀後半の屋敷跡とその付属施設と考えられる。

(1) 竪穴状遺構

１号竪穴状遺構（第４図）

調査区北西隅，２Ａ－ａ，ｂで検出された。北側は調査区外にのびる。平面形は不整方形であり，規模は長軸1.9m以上×短軸1.6m×深さ0.05mを測る。主軸方位は，Ｎ－16°－Ｅである。底面に径0.24～0.4m，深さ0.1～0.15mのピット４基が検出された。

(2) 土坑（第４図）

１号土坑

調査区西側，３Ｂ－ｃ，４Ｂ－ａで検出された。平面形は不整形であり，規模は長軸1.75m×短軸0.79m×深さ0.05mを測る。主軸方位はＮ－56°－Ｗである。

２号土坑

調査区中央部，４Ｃ－ｂで検出された。平面形は楕円形であり，規模は長軸0.69m×短軸0.44m×深さ0.3mを測る。主軸方位はＮ－０°である。２号溝ｂより新しい。

３号土坑

調査区西側，３Ｂ－ｄで検出された。平面形は不整形であり，規模は長軸2.35m×短軸2.1m×深さ0.07mを測る。主軸方位はＮ－61°－Ｗである。床面は斜めであり，５号土坑より新しい。

４号土坑

調査区西側，３Ｂ－ｃで検出された。平面形は楕円形であり，規模は長軸1.59m×短軸1.45m×深さ0.1mを測る。主軸方位はＮ－29°－Ｅである。５号土坑より新しい。

５号土坑

調査区西側，３Ｂ－ｃで検出された。平面形は長楕円形であり，規模は長軸4.83m×短軸1.48m×深さ0.12mを測る。主軸方位はＮ－69°－Ｅである。３，４号土坑より古い。

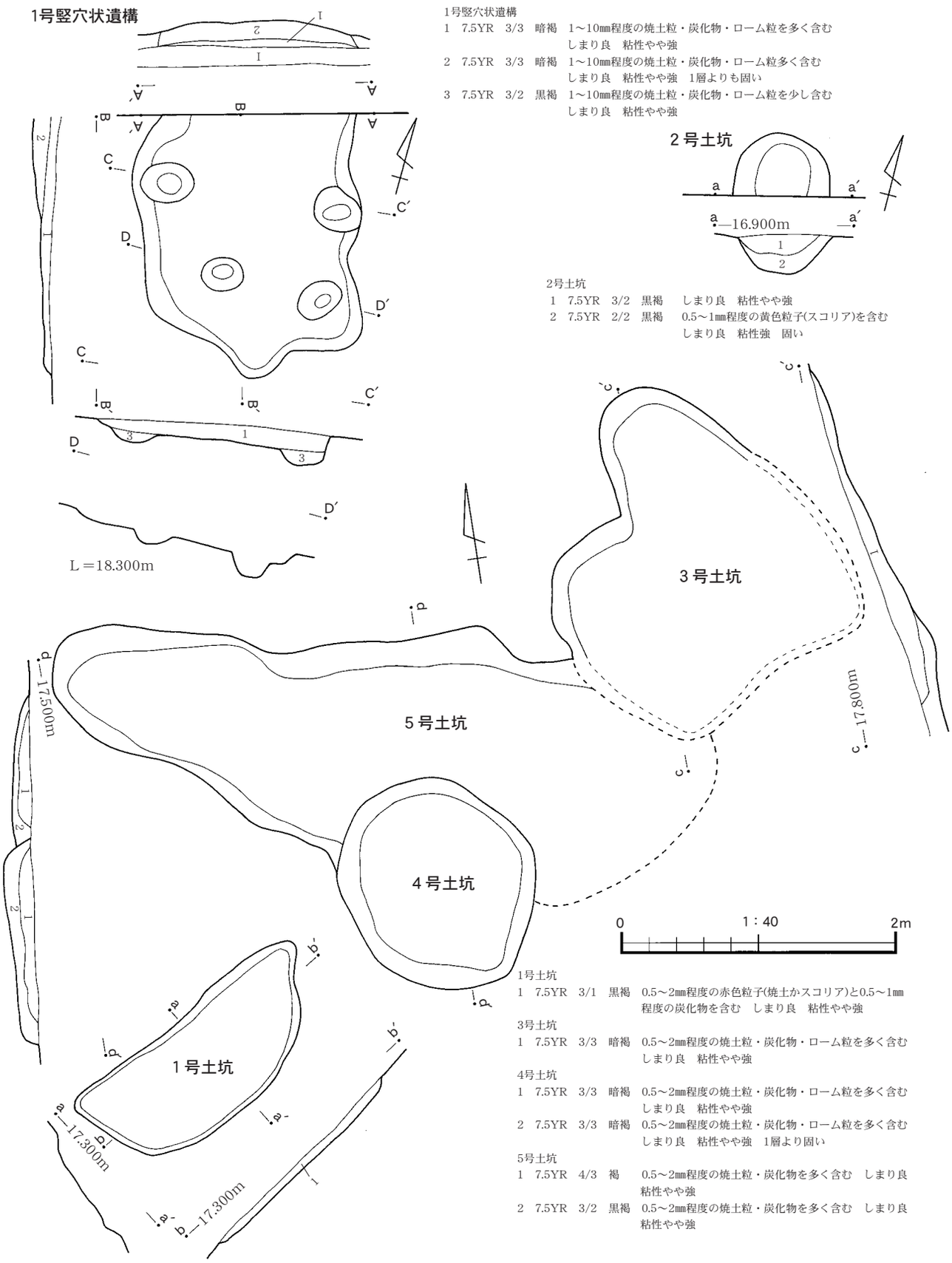
(3) 溝（第５図）

１号溝

幅0.28～0.43m，深さ0.08～0.3mを測る。南北に直線的に検出され，北側は調査区外にのびる。２号溝より新しい。

２号溝

新旧２条検出された。屋敷跡の東側に沿って検出され，台地上では調査区を南北に横切り直線的に検出されており，台地上へ通じる通路として使われていたと考えられる。２号溝ａは幅0.6～1.2m，深さ0.22～0.3mを測る。北側は調査区外にのびる。２号溝ｂは幅1.4～2.27m，深さ0.14～0.6mを測り，４号溝につながる。２号溝ａ，２号土坑より古い。



1号竪穴状遺構
1　7.5YR　3/3　暗褐　1～10mm程度の焼土粒・炭化物・ローム粒を多く含む
しまり良　粘性やや強
2　7.5YR　3/3　暗褐　1～10mm程度の焼土粒・炭化物・ローム粒多く含む
しまり良　粘性やや強　1層よりも固い
3　7.5YR　3/2　黒褐　1～10mm程度の焼土粒・炭化物・ローム粒を少し含む
しまり良　粘性やや強

2号土坑
1　7.5YR　3/2　黒褐　しまり良　粘性やや強
2　7.5YR　2/2　黒褐　0.5～1mm程度の黄色粒子(スコリア)を含む
しまり良　粘性強　固い

1号土坑
1　7.5YR　3/1　黒褐　0.5～2mm程度の赤色粒子(焼土かスコリア)と0.5～1mm
程度の炭化物を含む　しまり良　粘性やや強

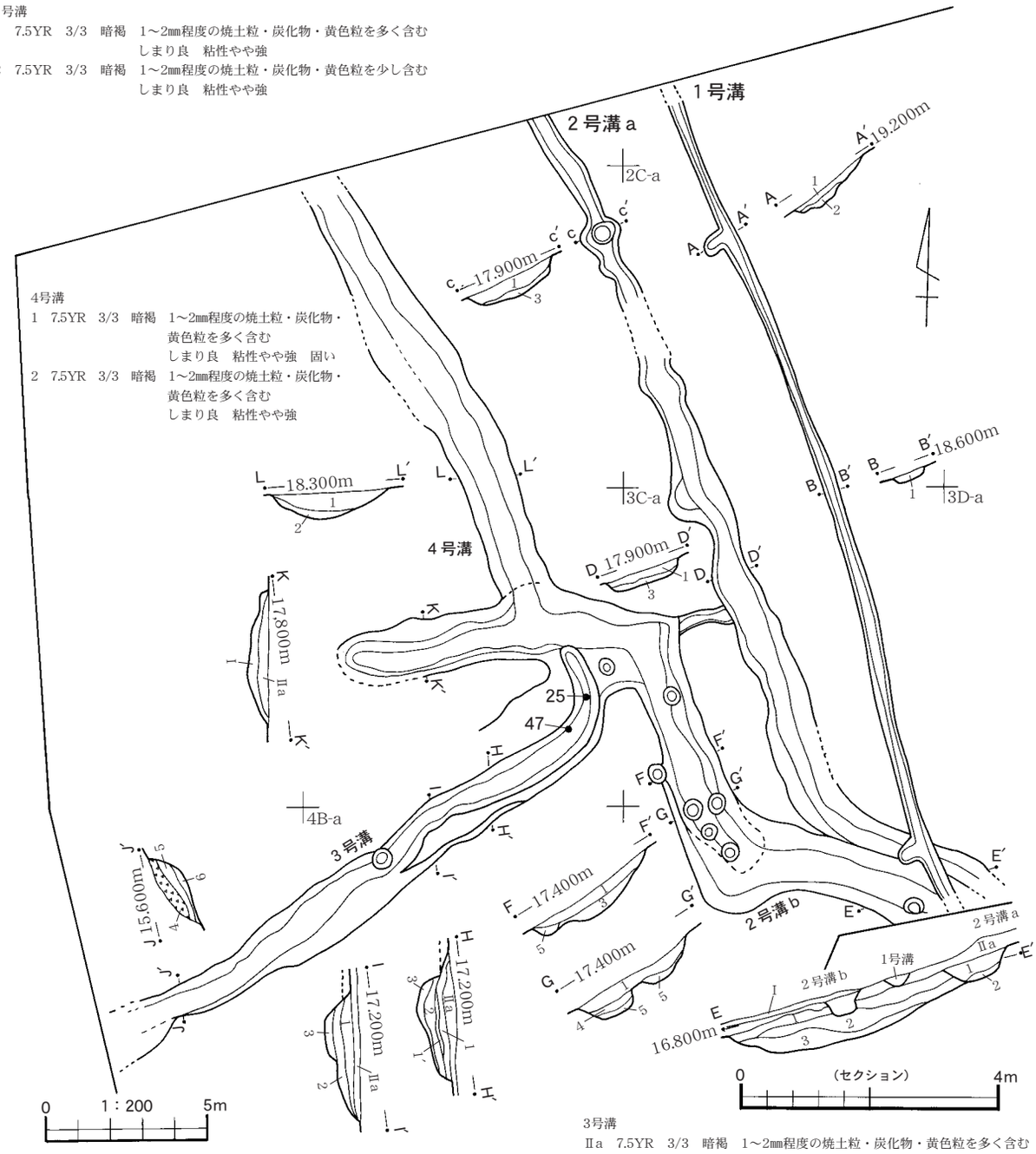
3号土坑
1　7.5YR　3/3　暗褐　0.5～2mm程度の焼土粒・炭化物・ローム粒を多く含む
しまり良　粘性やや強

4号土坑
1　7.5YR　3/3　暗褐　0.5～2mm程度の焼土粒・炭化物・ローム粒を多く含む
しまり良　粘性やや強
2　7.5YR　3/3　暗褐　0.5～2mm程度の焼土粒・炭化物・ローム粒を多く含む
しまり良　粘性やや強　1層より固い

5号土坑
1　7.5YR　4/3　褐　0.5～2mm程度の焼土粒・炭化物を多く含む　しまり良
粘性やや強
2　7.5YR　3/2　黒褐　0.5～2mm程度の焼土粒・炭化物を多く含む　しまり良
粘性やや強

第４図　１号竪穴状遺構・１～５号土坑

1号溝
1　7.5YR　3/3　暗褐　1～2mm程度の焼土粒・炭化物・黄色粒を多く含む
しまり良　粘性やや強
2　7.5YR　3/3　暗褐　1～2mm程度の焼土粒・炭化物・黄色粒を少し含む
しまり良　粘性やや強



4号溝
1　7.5YR　3/3　暗褐　1～2mm程度の焼土粒・炭化物・黄色粒を多く含む
しまり良　粘性やや強　固い
2　7.5YR　3/3　暗褐　1～2mm程度の焼土粒・炭化物・黄色粒を多く含む
しまり良　粘性やや強

2号溝a
1　7.5YR　3/4　暗褐　1～2mm程度の焼土粒・炭化物・黄色粒を少し含む
しまり良　粘性やや強
2　7.5YR　3/4　暗褐　1～2mm程度の焼土粒・炭化物・黄色粒を少し含む
しまり良　粘性強

2号溝b
1　7.5YR　3/3　暗褐　1～2mm程度の焼土粒・炭化物・黄色粒を多く含む
しまり良　粘性やや強
2　7.5YR　3/4　暗褐　1～2mm程度の焼土粒・炭化物・黄色粒を少し含む
しまり良　粘性強
3　7.5YR　3/3　暗褐　1～2mm程度の焼土粒・炭化物・黄色粒を少し含む
しまり良　粘性強
4　7.5YR　3/3　暗褐　1～2mm程度の焼土粒・炭化物・ローム粒を多く含む
しまり良　粘性やや強
5　7.5YR　3/4　暗褐　1～2mm程度の焼土粒・炭化物・ローム粒を少し含む
しまり良　粘性やや強

3号溝
Ⅱa　7.5YR　3/3　暗褐　1～2mm程度の焼土粒・炭化物・黄色粒を多く含む
しまり良　粘性やや強
1　7.5YR　3/3　暗褐　1～2mm程度の焼土粒・炭化物・黄色粒を多く含む
しまり良　粘性やや強
1′　7.5YR　4/4　暗褐　1～2mm程度の黄色粒ブロック集中(テフラ？)
1～2mm程度の焼土粒・炭化物を少し含む
しまり良　粘性やや強
2　7.5YR　3/3　暗褐　1～2mm程度の焼土粒・炭化物・黄色粒を少し含む
しまり良　粘性やや強
3　7.5YR　3/4　暗褐　1～2mm程度の焼土粒・炭化物・黄色粒を少し含む
しまり良　粘性強　固い
4　7.5YR　3/2　黒褐　1～2mm程度の黄色粒を多く焼土粒を少し含む
上層に貝ブロック(アサリ・シオフキ)を含む
しまり良　粘性やや強　固い
5　7.5YR　3/3　暗褐　1～2mm程度の黄色粒・焼土粒を少し含む
しまり良　粘性やや強
6　7.5YR　3/4　暗褐　しまり良　粘性強

第５図　１～４号溝

３号溝

屋敷跡の北西壁面を掘り込み，台地上に至る部分のみ検出されているが，本来は平成７年度調査区との境界にも存在していたと考えられる。北端で４号溝につながる。幅1.1～1.94m，深さ0.37～0.44mを測る。アサリ・シオフキを主体とする貝ブロックが１ヶ所検出された。図示した出土遺物は２点であり，第13図25は常滑窯甕胴部，第14図47は砥石である。

４号溝

幅1.45～1.8m，深さ0.2～0.44mを測る。南端で３号溝とつながり，北側は調査区外にのびる。図示した出土遺物は瀬戸窯梅瓶の底部（第13図12）と砥石４点である。（第14図48～51）

(4) 区画

１号区画（第６図）

調査区北西部，３Ａグリッドで検出された。緩斜面を整形して方形の区画を作り出している。西側は調査区外にのびる。規模は，調査区内で南北11m×東西6.6mである。深さは０～0.4mを測る。周囲に溝をめぐらし，内部におそらく建物になると考えられるピット群が検出された。遺構に伴う遺物は出土していない。

(5) 屋敷跡（第７図）

埋没谷の周囲を掘削し，埋没谷を埋め立ててテラス状に平坦面を作り出し，地下式坑，土坑，溝，ピットといった遺構が検出されている。屋敷として使用されていたと考えられる。平坦部の規模は，東西約29m，南北約17mを測り，面積約425㎡である。台地上との比高差は約３m，旧水田面との比高差は３～４mである。なお屋敷跡の東部分は平成13年度に報告済みである。（第８図）

①地下式坑

１号地下式坑（第９図）

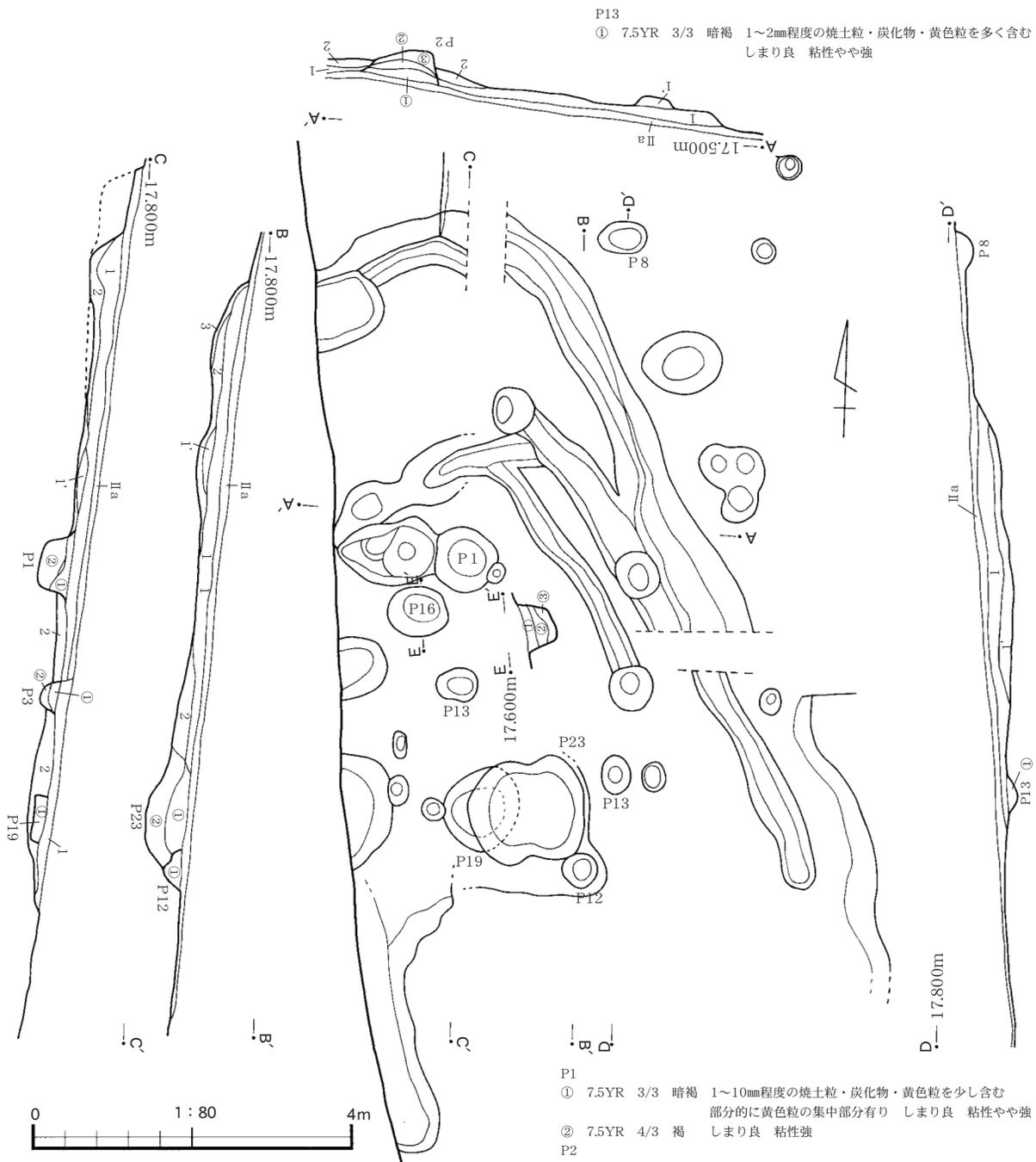
調査区西側，５Ａ－ｂ，ｄ，５Ｂ－ａ，ｃで検出された。入口は主室の西側に開口し，遺構確認面から1.1 m降りて主室に至る。主室の平面形は長方形であり，規模は長軸2.5m×短軸1.75m×高さ1.9mを測る。天井部は調査時には存在しており，断面はカマボコ型を呈していた。天井厚は0.5～0.6mを測る。主軸方位はＮ－ 74°－Ｗである。図示した出土遺物は３点である。第13図４はかわらけ，第14 図30 は常滑窯甕の胴部，第15図55は溶解炉の炉壁片である。

２号地下式坑（第９図）

調査区北側，３Ｂ－ｄ，４Ｃ－ｃで検出された。入口は主室の南側に開口し，遺構確認面から0.8m降りて主室に至る。主室は屋敷地の奥に掘り込まれる。入口に対して主室の軸が 17°ほど西にずれる。主室の平面形は長方形であり，規模は長軸1.43m×短軸1.24m×高さ1.1m以上を測る。天井部は調査時には存在していたが，形状，天井厚は不明である。入口の主軸方位はＳ－０°である。図示した出土遺物は内耳土器片１点である。（第14図35）

３号地下式坑（第10図）

調査区北側，４Ｂ－ｃ，ｄで検出された。入口は主室の東側に開口し，主室の中央より若干南側によっている。遺構確認面から1.5m降りる階段状の入口を有する。主室の平面形は長方形であり，規模は長軸2.55m×短軸1.7m×高さ２mを測る。天井部は調査時には存在しており，断面はカマボコ型



P13
① 7.5YR 3/3 暗褐 1～2mm程度の焼土粒・炭化物・黄色粒を多く含む
しまり良 粘性やや強

1号区画

IIa	7.5YR	3/3	暗褐	1～10mm程度の焼土粒・炭化物・黄色粒を多く含む 部分的に焼土粒が集中して含まれる しまり良 粘性やや強 1層より固い 包含層
1	7.5YR	3/3	暗褐	1～2mm程度の焼土粒・炭化物・黄色粒を多く含む しまり良 粘性やや強
1'	7.5YR	3/3	暗褐	1～2mm程度の焼土粒・炭化物・黄色粒を多く含む しまり良 粘性やや強 1層より固い
2	7.5YR	3/4	暗褐	1～2mm程度の焼土粒・炭化物・黄色粒を多く含む しまり良 粘性やや強
3	7.5YR	4/3	褐	しまり良 粘性強

P12

①	7.5YR	3/3	暗褐	1～2mm程度の焼土粒・黄色粒を多く含む しまり良 粘性やや強

P23

①	7.5YR	3/3	暗褐	1～2mm程度の焼土粒・炭化物・黄色粒を多く含む しまり良 粘性やや強
②	7.5YR	3/4	暗褐	1～2mm程度の焼土粒・炭化物・黄色粒を多く含む しまり良 粘性やや強

P1

①	7.5YR	3/3	暗褐	1～10mm程度の焼土粒・炭化物・黄色粒を少し含む 部分的に黄色粒の集中部分有り しまり良 粘性やや強
②	7.5YR	4/3	褐	しまり良 粘性強

P2

①	7.5YR	3/3	暗褐	1～2mm程度の焼土粒・炭化物・黄色粒を多く含む しまり良 粘性やや強
②	7.5YR	3/3	暗褐	1～2mm程度の焼土粒・炭化物・黄色粒を多く含む しまり良 粘性やや強
③	7.5YR	3/4	暗褐	1～2mm程度の焼土粒・炭化物・黄色粒を少し含む しまり良 粘性やや強

P3

①	7.5YR	3/3	暗褐	1～2mm程度の焼土粒・炭化物・黄色粒を多く含む しまり良 粘性やや強
②	7.5YR	3/4	暗褐	1～2mm程度の焼土粒・炭化物・黄色粒を多く含む しまり良 粘性やや強

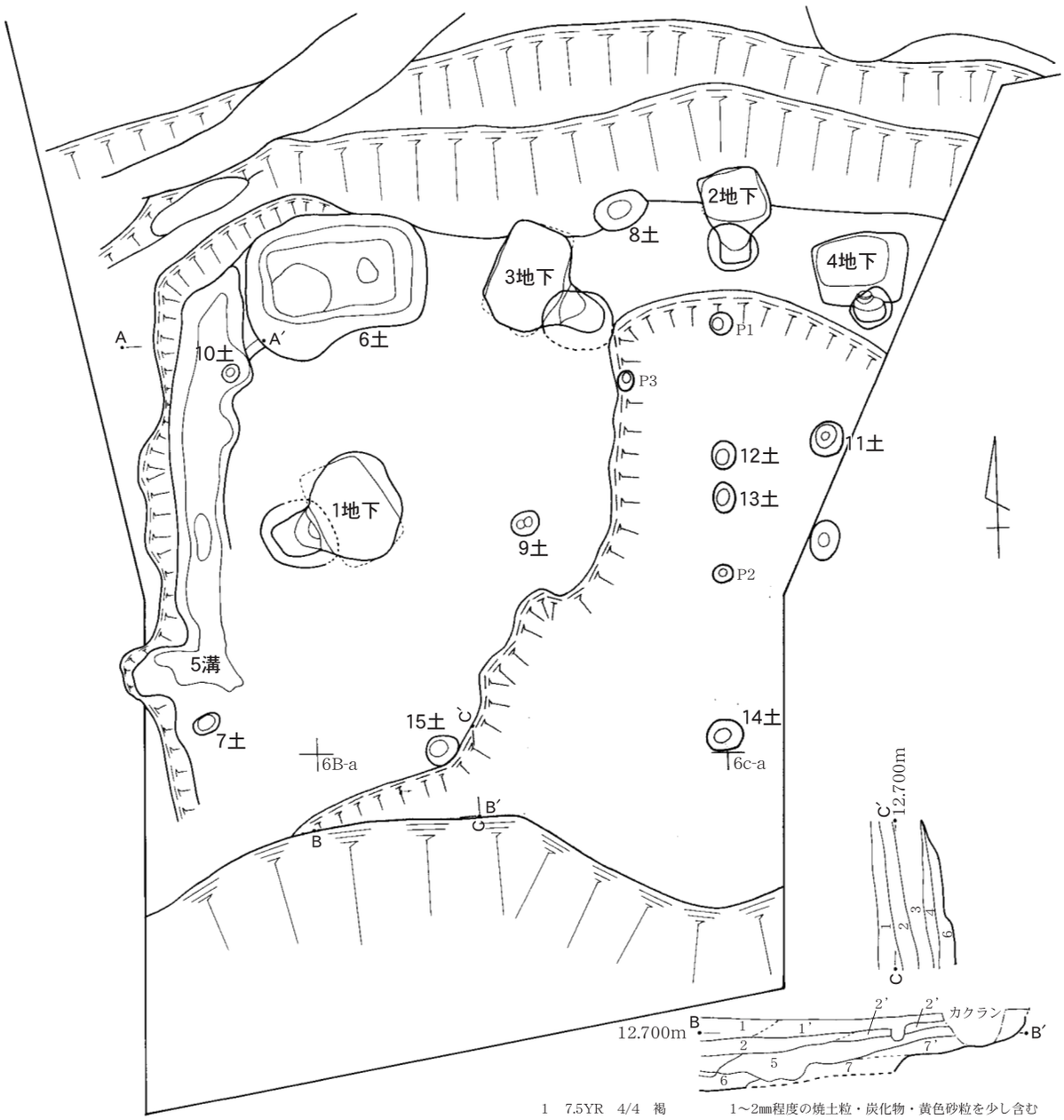
P16

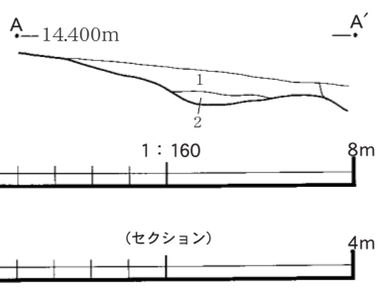
①	7.5YR	3/3	暗褐	1～2mm程度の焼土粒・炭化物・黄色粒を多く含む しまり良 粘性やや強
②	7.5YR	3/3	暗褐	1～2mm程度の焼土粒・炭化物・黄色粒を少し含む しまり良 粘性やや強
③	7.5YR	3/4	暗褐	1～2mm程度の焼土粒・炭化物・黄色粒を少し含む しまり良 粘性やや強

P19

①	7.5YR	3/3	暗褐	1～2mm程度の焼土粒・炭化物・黄色粒を少し含む しまり良 粘性やや強

第６図　１号区画





5号溝

1　7.5YR　3/3　暗褐　1～2㎜程度の焼土粒・炭化物を少し、黄色砂粒を多く含む
しまり良　粘性やや強

2　7.5YR　3/3　暗褐　1～2㎜程度の焼土粒・炭化物・黄色砂粒を少し含む
しまり良　粘性やや強

1　7.5YR　4/4　褐　1～2㎜程度の焼土粒・炭化物・黄色砂粒を少し含む
しまり良　粘性やや弱

1’7.5YR　3/3　暗褐　1～2㎜程度の焼土粒・炭化物・黄色砂粒を少し含む
しまり良　粘性やや弱

2　7.5YR　3/2　黒褐　1～2㎜程度の焼土粒・炭化物・黄色砂粒を少し含む
しまり良　粘性やや強

2’7.5YR　3/4　暗褐　1～5㎜程度の黄色砂粒を少し含む
しまり良　粘性やや強

3　7.5YR　4/6　褐　1～5㎜程度の黄色砂粒を多く含む
砂質しまり良　粘性やや強

4　7.5YR　4/3　褐　1～5㎜程度の黄色砂粒を多く含む
砂質しまり良　粘性強

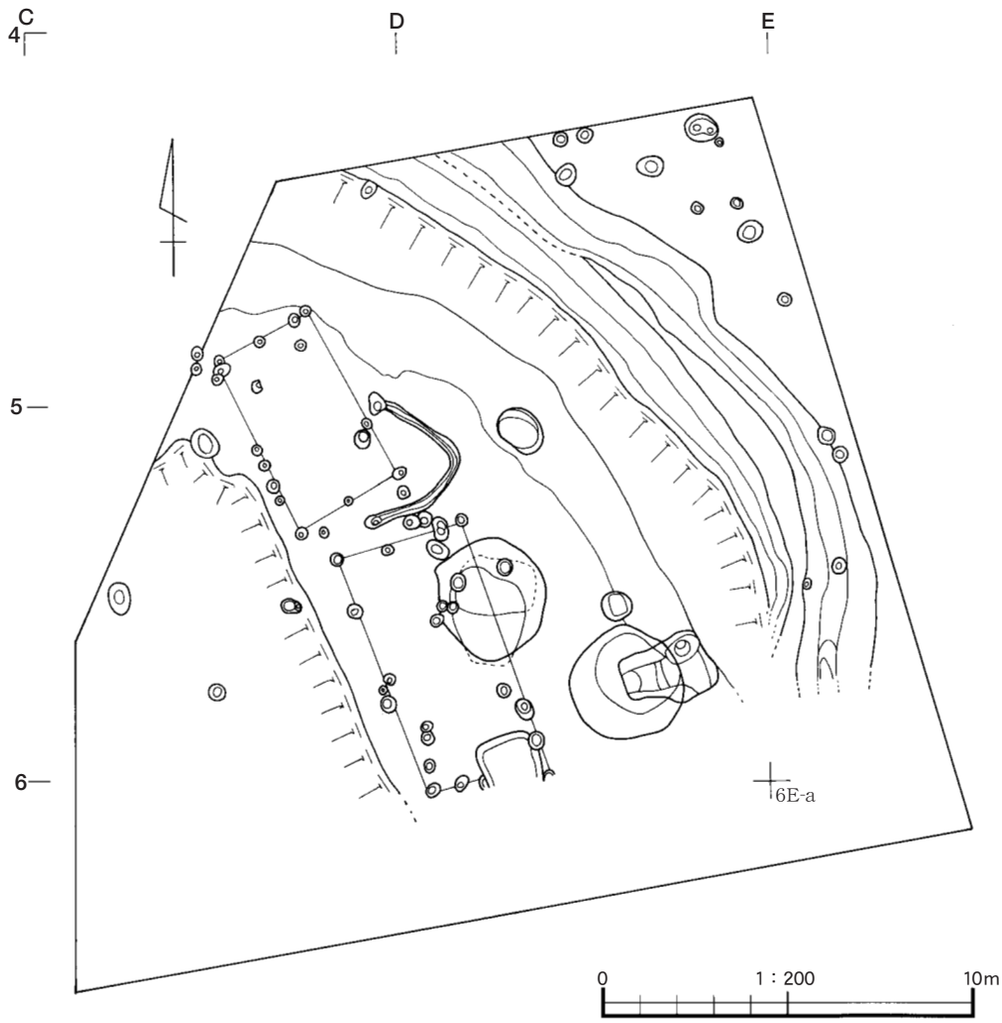
5　7.5YR　3/4　暗褐　1～5㎜程度の黄色砂粒を少し含む
しまり良　粘性やや強

6　7.5YR　4/4　褐　1～5㎜程度の黄色砂粒を多く含む
粘土質しまり良　粘性強

7　10YR　5/4　にぶい黄褐　1～5㎜程度の黄色砂粒を少し含む
粘土質しまり良　粘性強

7’7.5YR　4/6　褐　1～5㎜程度の黄色砂粒を少し含む
砂質しまり良　粘性強

第７図　屋敷跡



第８図　遺構配置図（既報告分）

を呈していた。天井厚は0.9～1.3mを測る。主軸方位はＳ－ 67°－Ｅである。

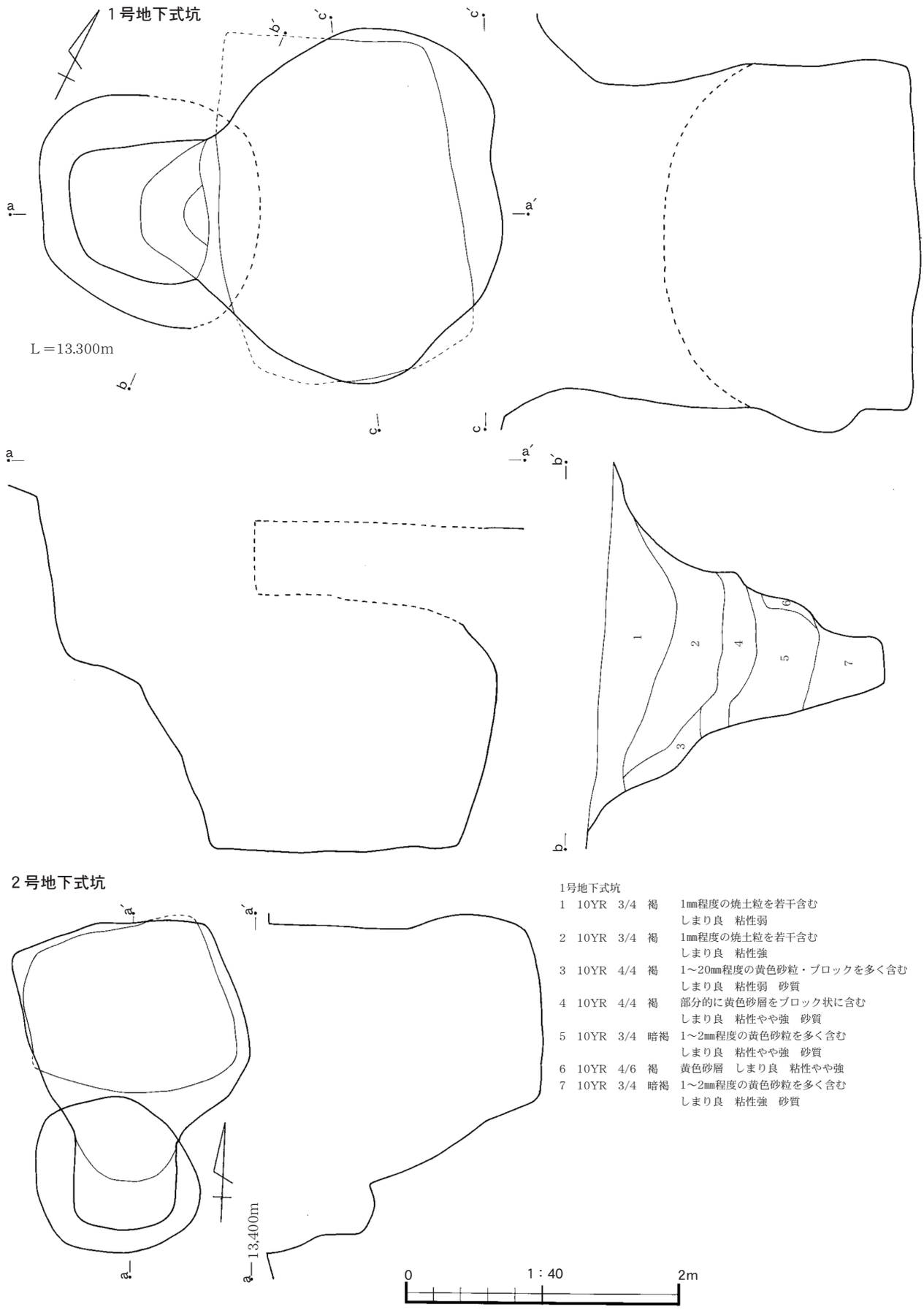
４号地下式坑（第10図）

調査区北側，４Ｃ－ｃで検出された。入口は主室南側に開口し，遺構確認面から３段の階段を有し，1.3m降りて主室に至る。主室の平面形は長方形であり，規模は長軸2.55m×短軸1.7m×高さ２mを測る。天井部は調査時には存在しており，断面はカマボコ型を呈していた。天井厚は0.8～1.3mを測る。主軸方位はＳ－ 16°－Ｅである。

②土坑

６号土坑（第11図）

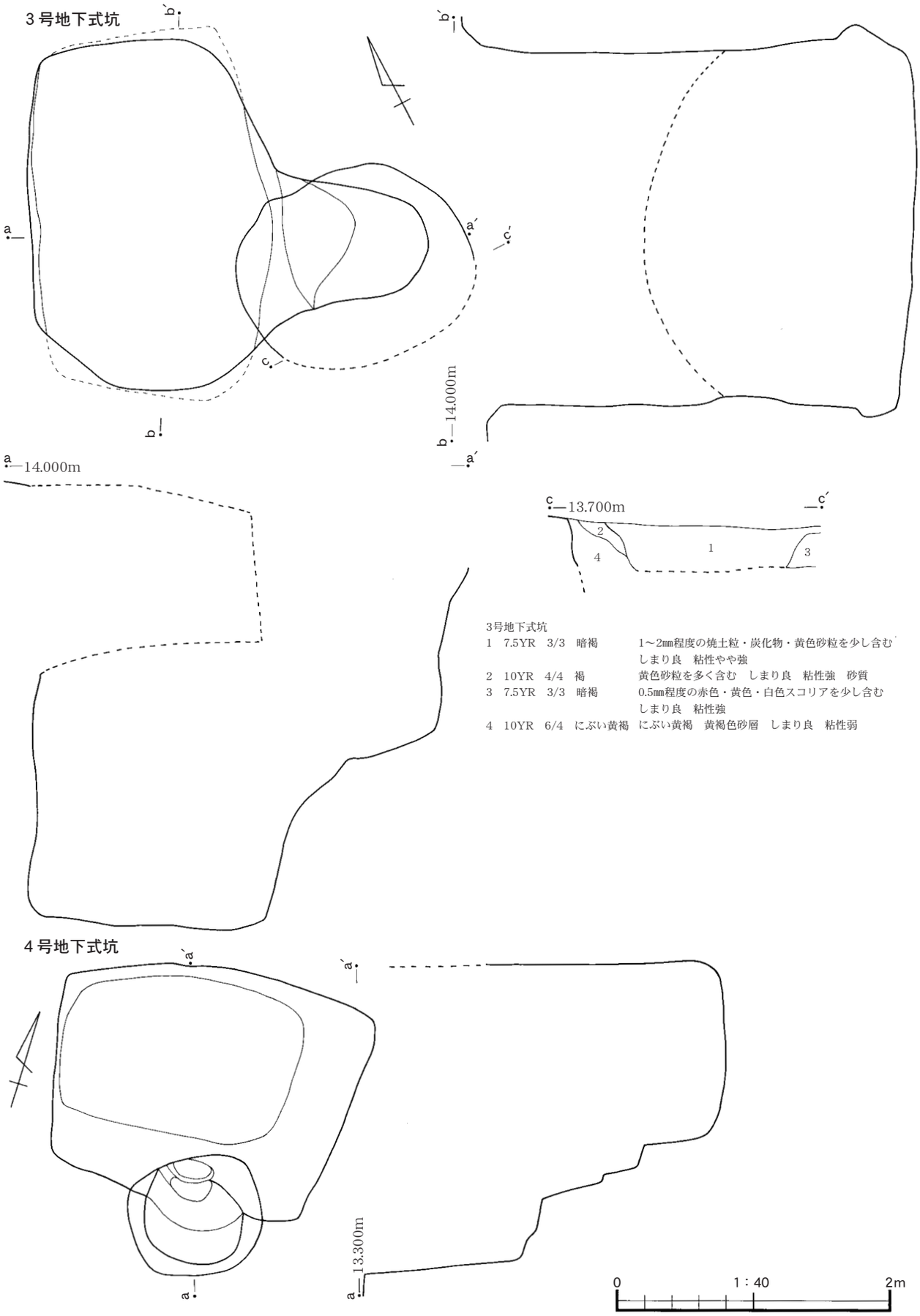
屋敷跡北西隅，４Ａ－ｄ，４Ｂ－ｃで検出された。西側に５号溝が隣接する。平面形は長方形であり，規模は長軸4.54m×短軸2.72m×深さ0.54mを測り，大型の土坑である。主軸方位はＳ－ 18°－Ｅである。出土遺物は多く，特に石が多量に出土しているが，目立った加工は施されていない。図示した遺物は11点である。（第13図５，６，15，21，22，27，第14図 28，34，42，43，第15図59）



1号地下式坑

1	10YR 3/4	褐	1mm程度の焼土粒を若干含む しまり良　粘性弱
2	10YR 3/4	褐	1mm程度の焼土粒を若干含む しまり良　粘性強
3	10YR 4/4	褐	1～20mm程度の黄色砂粒・ブロックを多く含む しまり良　粘性弱　砂質
4	10YR 4/4	褐	部分的に黄色砂層をブロック状に含む しまり良　粘性やや強　砂質
5	10YR 3/4	暗褐	1～2mm程度の黄色砂粒を多く含む しまり良　粘性やや強　砂質
6	10YR 4/6	褐	黄色砂層　しまり良　粘性やや強
7	10YR 3/4	暗褐	1～2mm程度の黄色砂粒を多く含む しまり良　粘性強　砂質

第９図　１・２号地下式坑



第10図　3・4号地下式坑

７号土坑（第11図）

屋敷跡南西側，４Ｂ－ｄで検出された。北側に５号溝が隣接する。平面形は楕円形であり，規模は長軸0.5m×短軸0.44m×深さ0.6mを測る。主軸方位はＮ－70°－Ｅである。東側の壁が0.14mほどオーバーハングしている。図示した出土遺物は２点であり，第14図38は内耳土器片，第15図58は溶解炉の炉壁片である。

８号土坑（第11図）

屋敷跡の北端の壁面下，４Ｂ－ｄで検出された。西側に３号地下式坑，東側に２号地下式坑が隣接する。平面形は楕円形であり，規模は長軸1.24m×短軸0.92m×深さ0.42mを測り，やや大型の土坑である。主軸方位はＮ－55°－Ｗである。図示した出土遺物は砥石１点である。（第14図46）

９号土坑（第11図）

屋敷跡の中央部，５Ｂ－ａ，ｂで検出された。平面形は長方形であり，規模は長軸0.82m×短軸0.61m×深さ0.35mを測る。主軸方位はＮ－53°－Ｗである。

10号土坑（第11図）

屋敷跡の西側，５Ａ－ｂで５号溝内より検出された。平面形は楕円形であり，規模は長軸0.44m×短軸0.45m×深さ0.45mを測る。主軸方位はＮ－44°－Ｗである。

11号土坑（第11図）

屋敷跡の中央部，５Ｃ－ａで検出された。平面形は楕円形であり，規模は長軸0.85m×短軸0.65m×深さ0.3mを測るやや大型の土坑である。底面中央部がピット状に0.3mほど深くなる。主軸方位はＮ－46°－Ｗである。

12号土坑（第12図）

屋敷跡の中央部，５Ｃ－ａ，５Ｂ－ｂで検出された。埋没谷セクション上で遺構が確認されたため東側は消失している。平面形は楕円形であり，規模は推定長軸0.70m×短軸0.48m×深さ0.36mを測る。主軸方位はＮ－０°である。

13号土坑（第12図）

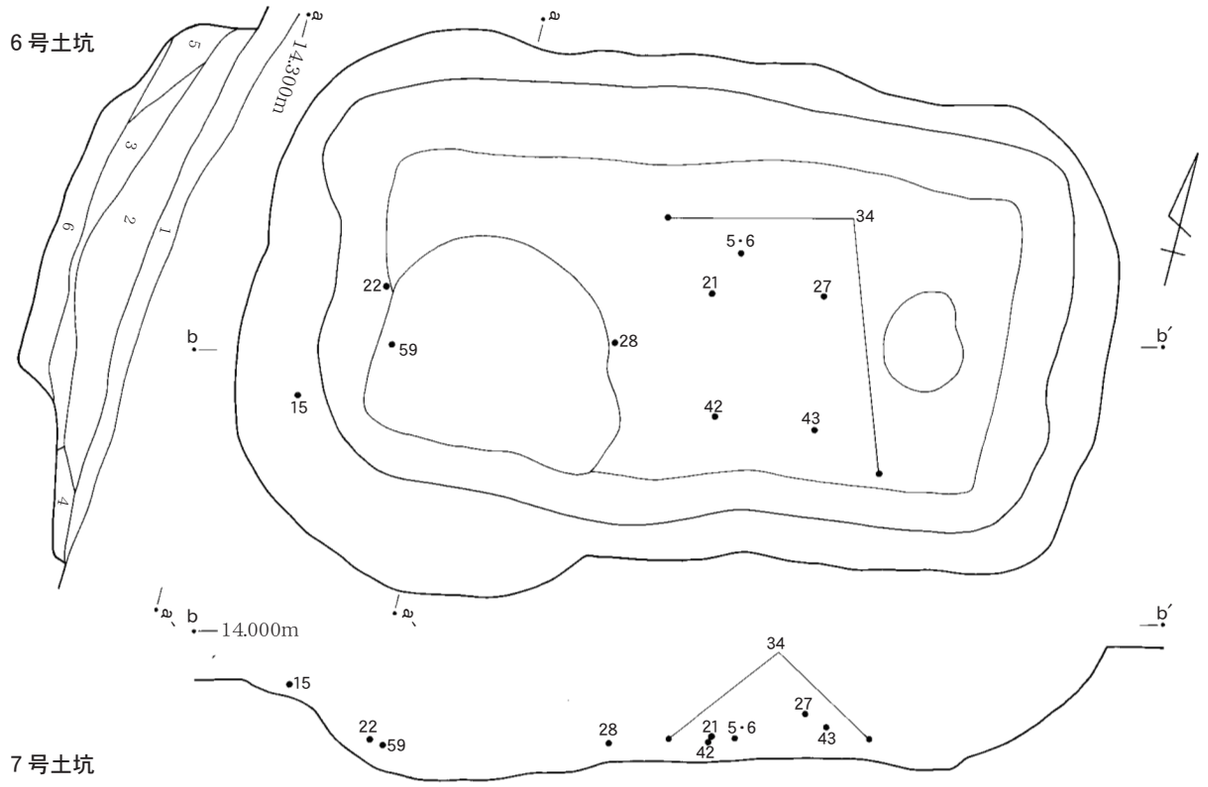
屋敷跡の中央部，５Ｃ－ａ，５Ｂ－ｂで検出された。12号土坑と同様に埋没谷セクション上で遺構が確認された。平面形は楕円形であり，規模は推定長軸1.01m×短軸0.64m×深さ0.24mを測る。主軸方位はＮ－０°である。

14号土坑（第12図）

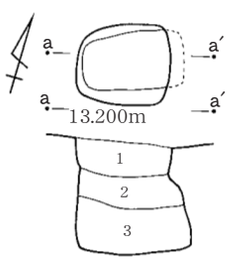
屋敷跡の南側，５Ｃ－ｃ，５Ｂ－ｂで検出された。12号土坑と同様に埋没谷セクション上で遺構が確認された。平面形は楕円形であり，規模は推定長軸0.87m×短軸0.68m×深さ0.7mを測る。主軸方位はＮ－90°－Ｅである。図示した出土遺物は常滑窯片口鉢１点である。（第13図20）

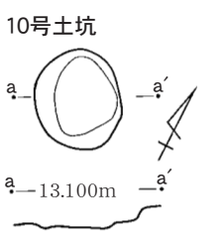
15号土坑（第11図）

屋敷跡の南西側，５Ｂ－ｃ，６Ｂ－ａで検出された。平面形は楕円形であり，規模は長軸0.44m×短軸0.43m×深さ0.33mを測る。主軸方位はＮ－90°－Ｅである。西側の壁が0.05mほどオーバーハングしている。

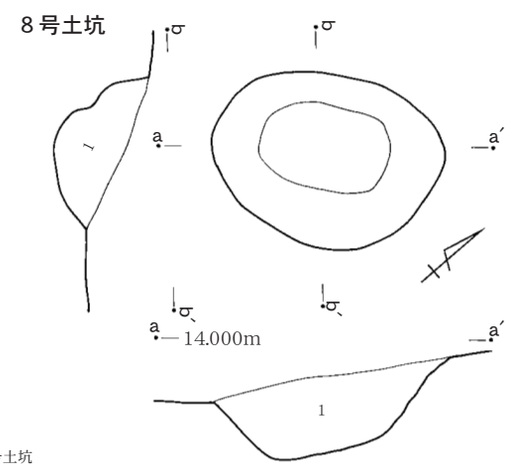


6号土坑
1　7.5YR　3/3　暗褐　1～2㎜程度の焼土粒・黄色砂粒を少し含む
　　しまり良　粘性やや強
2　10YR　3/4　暗褐　所々に黄色砂を含む　しまり良　粘性強
3　10YR　3/4　暗褐　1～20㎜程度の黄色砂粒・ロームブロックを多く含む
　　しまり良　粘性強
4　10YR　4/6　暗褐　黄色砂層　粘土質　しまり良　粘性強
5　10YR　4/4　褐　1～2㎜程度の黄色砂粒を多く含む　しまり良　粘性強
6　10YR　4/1　褐灰　所々に黄色砂を含む　しまり良　粘性強

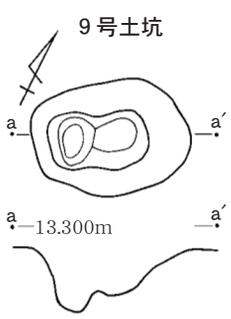


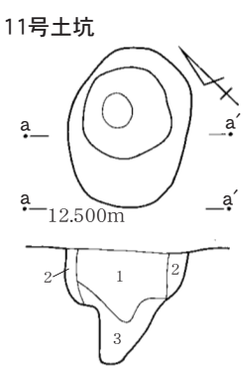


7号土坑
1　7.5YR　3/4　暗褐　1～2㎜程度の焼土粒・炭化物
　　1～50㎜程度の黄色砂粒・ブロックを少し含む
　　しまり良　粘性やや強
2　7.5YR　3/3　暗褐　1～2㎜程度の焼土粒・炭化物
　　1～5㎜程度の黄色砂粒を少し含む
　　しまり良　粘性やや強
3　7.5YR　3/3　暗褐　1～30㎜程度の黄色砂粒・ブロックを多く含む
　　しまり良　粘性やや強

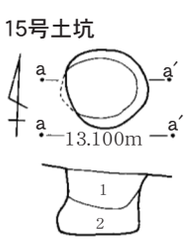


8号土坑
1　7.5YR　4/3　褐　1～2㎜程度の焼土粒・炭化物を少し，黄色砂粒を多く含む
　　しまり良　粘性強

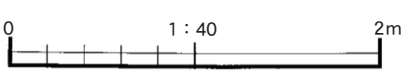




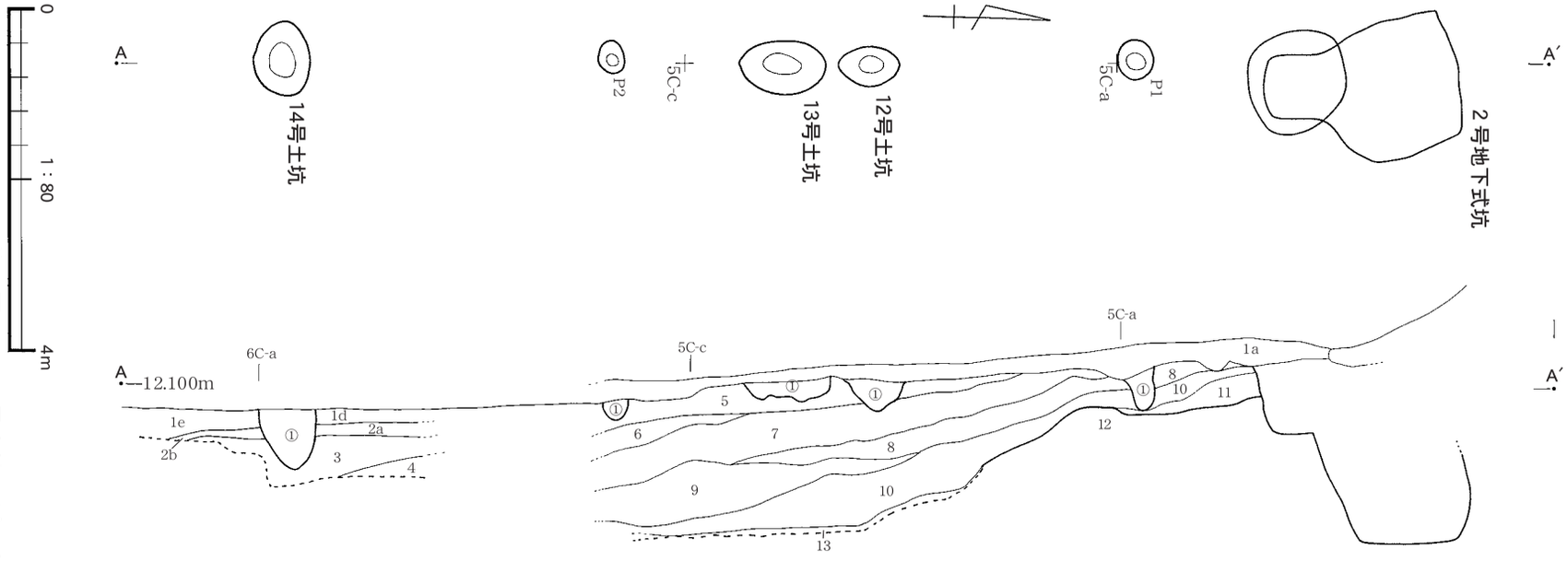
11号土坑
1　7.5YR　3/2　黒褐　1～2㎜程度の焼土粒・炭化物・黄色砂粒を多く含む
　　しまり良　粘性やや強
2　7.5YR　3/3　暗褐　1～2㎜程度の焼土粒・炭化物・黄色砂粒を少し含む
　　しまり良　粘性やや強
3　7.5YR　3/3　暗褐　しまり良　粘性強



15号土坑
1　7.5YR　4/4　褐　1～5㎜程度の黄色砂粒を多く含む
　　しまり良　粘性やや強
2　7.5YR　4/6　褐　1～5㎜程度の黄色砂粒を多く含む
　　しまり良　粘性やや強　砂質



第11図　6～11・15号土坑



第12図　12～14号土坑・ピット・埋没谷土層断面図

1a	7.5YR	3/3	暗褐	1～2㎜程度の焼土粒・炭化物・黄色砂粒を少し含む しまり良　粘性やや強
1b	7.5YR	4/3	褐	1～2㎜程度の焼土粒・炭化物・黄色砂粒を多く含む しまり良　粘性やや強　堅固
1c	7.5YR	3/4	暗褐	1～2㎜程度の焼土粒・炭化物・黄色砂粒を少し含む しまり良　粘性やや強
1d	7.5YR	3/4	暗褐	1～2㎜程度の焼土粒・炭化物・黄色砂粒を少し含む しまり良　粘性やや強　堅固
1e	7.5YR	3/3	暗褐	1～2㎜程度の焼土粒・炭化物・黄色砂粒を少し含む しまり良　粘性やや強
2a	7.5YR	3/3	暗褐	1～2㎜程度の焼土粒・炭化物・黄色砂粒を少し含む しまり良　粘性やや強
2b	7.5YR	4/3	褐	しまり良　粘性やや強
3	7.5YR	3/2	黒褐	1～2㎜程度の焼土粒・炭化物・黄色砂粒を少し含む しまり良　粘性やや強
4	7.5YR	3/4	暗褐	しまり良　粘性強
5	7.5YR	3/4	暗褐	1～2㎜程度の焼土粒・炭化物・黄色砂粒を少し含む 中世の遺物を含む　しまり良　粘性やや強
6	7.5YR	3/4	暗褐	しまり良　粘性強
7	7.5YR	3/4	暗褐	しまり良　粘性強
8	7.5YR	3/3	暗褐	0.5㎜程度の赤色・黄色・白色スコリアを少し含む しまり良　粘性強
9	7.5YR	3/3	暗褐	0.5㎜程度の赤色・黄色・白色スコリアを少し含む しまり良　粘性強
10	7.5YR	4/6	褐	0.5㎜程度の赤色・黄色・白色スコリアを少し含む しまり良　粘性強
11	7.5YR	3/3	暗褐	0.5㎜程度の赤色・黄色・白色スコリアを少し含む しまり良　粘性強
12	7.5YR	4/3	褐	0.5㎜程度の赤色・黄色・白色スコリアを少し含む 所々に黄色砂ブロックを含む　しまり良　粘性強
13	10YR	7/6	明黄褐	明黄褐　黄色砂層　しまり良　粘性弱
土坑・ピット				
①	7.5YR	3/3	暗褐	1～2㎜程度の焼土粒・炭化物・黄色砂粒を多く含む しまり良　粘性やや強

③溝

５号溝

屋敷跡西端，４Ａ－ｄ，５Ａ－ｃ，ｄで検出された。幅1.04～1.6m，深さ0.07～0.4mを測る。１号地下式坑，６号土坑より古い。

④ピット・埋没谷（第12図）

ピットは埋没谷の断ち割り段階で検出できたものがいくつかあり，おそらくは周辺にもピット群が広がっていたと考えられるが，遺構確認が困難であったため，明確には検出できなかった。

埋没谷は上層には中世遺物包含層，その下に縄文時代前期後半から奈良・平安時代に至る遺物包含層が形成されている。

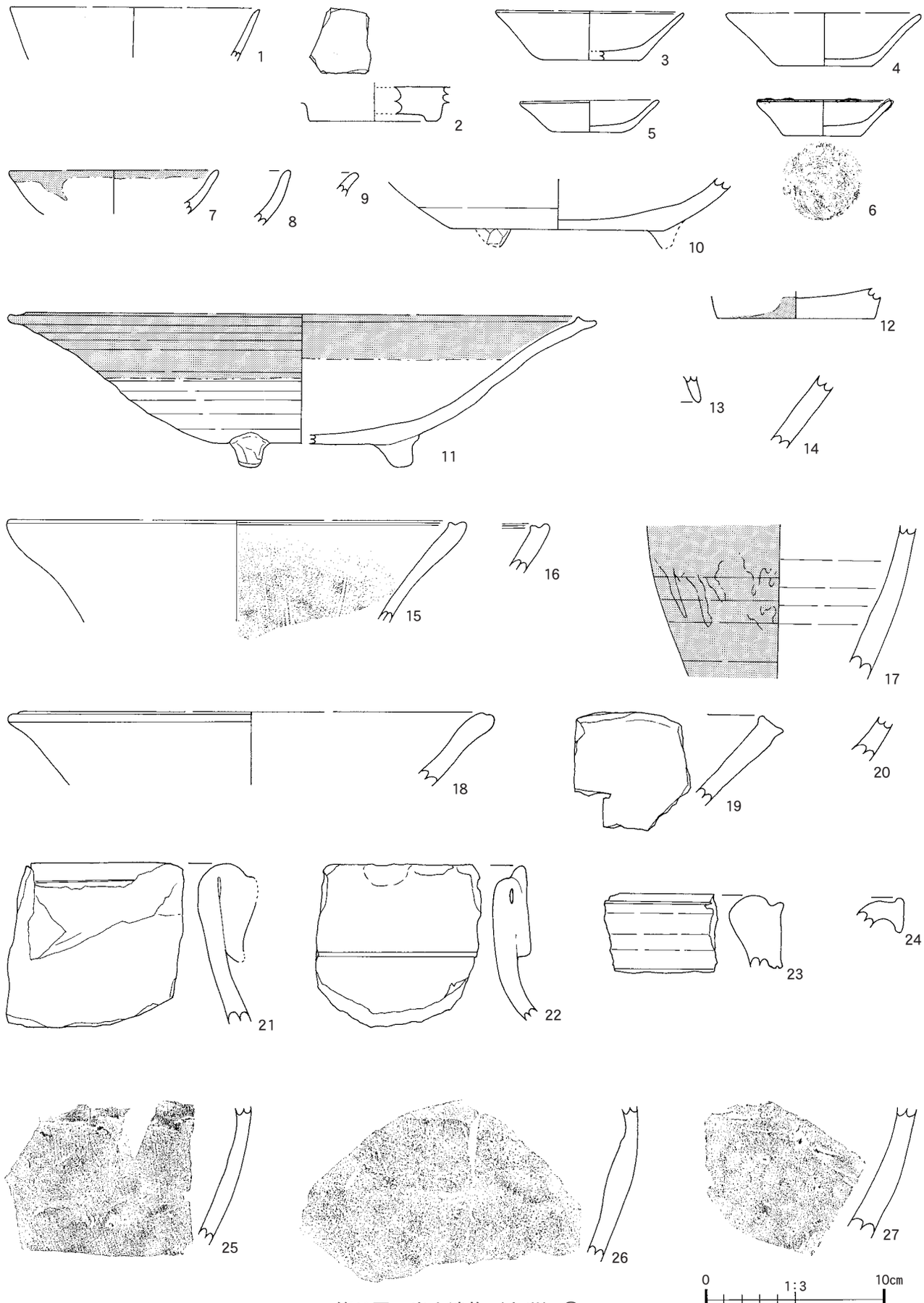
(6) 出土遺物（第13～16図）

第13～15図は中世遺物を取り上げた。出土遺物は調査区出土のものが多く，屋敷跡からの出土が多い。６号土坑から多くの遺物が出土している。

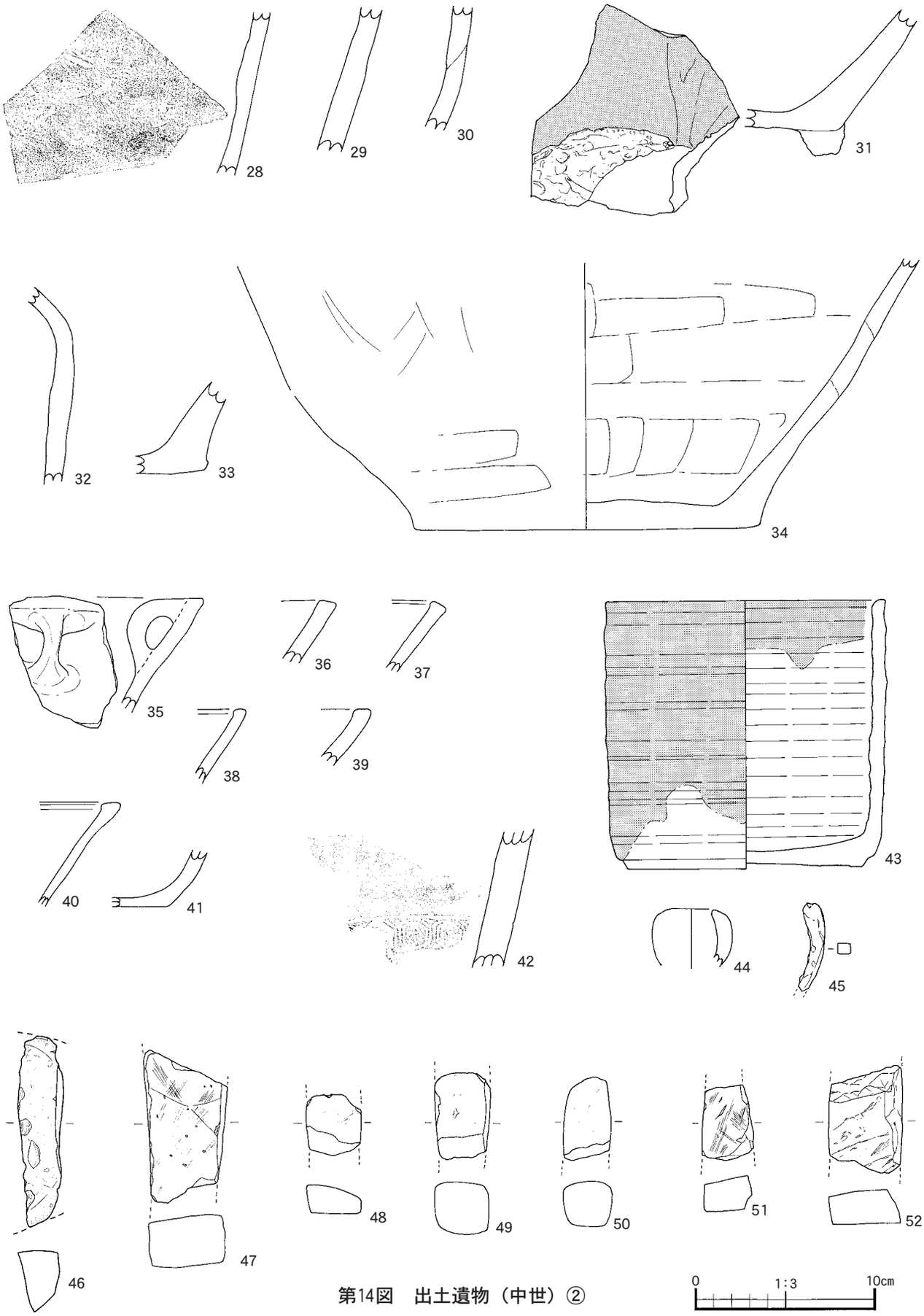
１，２は青磁碗，３～６はかわらけであり，５，６は６号土坑から出土している。７～12は瀬戸窯製品であり，７～９は皿，10は盤類，11は卸目付大皿，12は梅瓶の底部である。13，14，18～20は常滑窯片口鉢であり，13，14は高台付のもの，18は口唇部に沈線が施されている。15，16は在地系の擂鉢であり，口縁部内側が突出する形態をもつ。17は常滑窯壺と考えられる。21～34は常滑窯甕である。35～41は内耳土器である。40のみが瓦質である。小片が多く，全体を伺えるものはない。42は瓦質火鉢である。外面は黒色処理が施され，「亀甲に四つ目結い」のスタンプ列が施される。43は６号土坑出土瀬戸窯筒型容器であるが，隣接する平成７年度調査２号地下式坑出土品と同一個体と考えられる。44は５Ｃ－ａ出土の土製品であり，内面に溶解物付着の痕跡があるため坩堝もしくはとりべと考えられる。底部は欠損している。45は５Ｂ‐ｂ出土の釘であり，現存長4.9㎝，断面は方形で一辺0.65㎝を測る。46～52は砥石である。小片のものが多い。

53～59は溶解炉の炉壁片と考えられる。胎土は砂粒を多く含み，灰色の色調を帯びる。外面に成形痕が認められるものが多く，内面は溶解面となり気泡が多く見られる。53，54，56，57は５Ｂ－ｂグリッド出土，55は１号地下式坑，58は７号土坑，59は６号土坑出土である。53は唯一法量が推定できるものであり，推定径49.4㎝，残存高13.4㎝を測る。これら炉壁片のなかには内側に幾重にも炉壁がつくられているものがみられ，溶解炉は一度つくられると何度も使用されたことが伺える。なお今回の調査では，鋳造関係の遺構は検出されなかった。

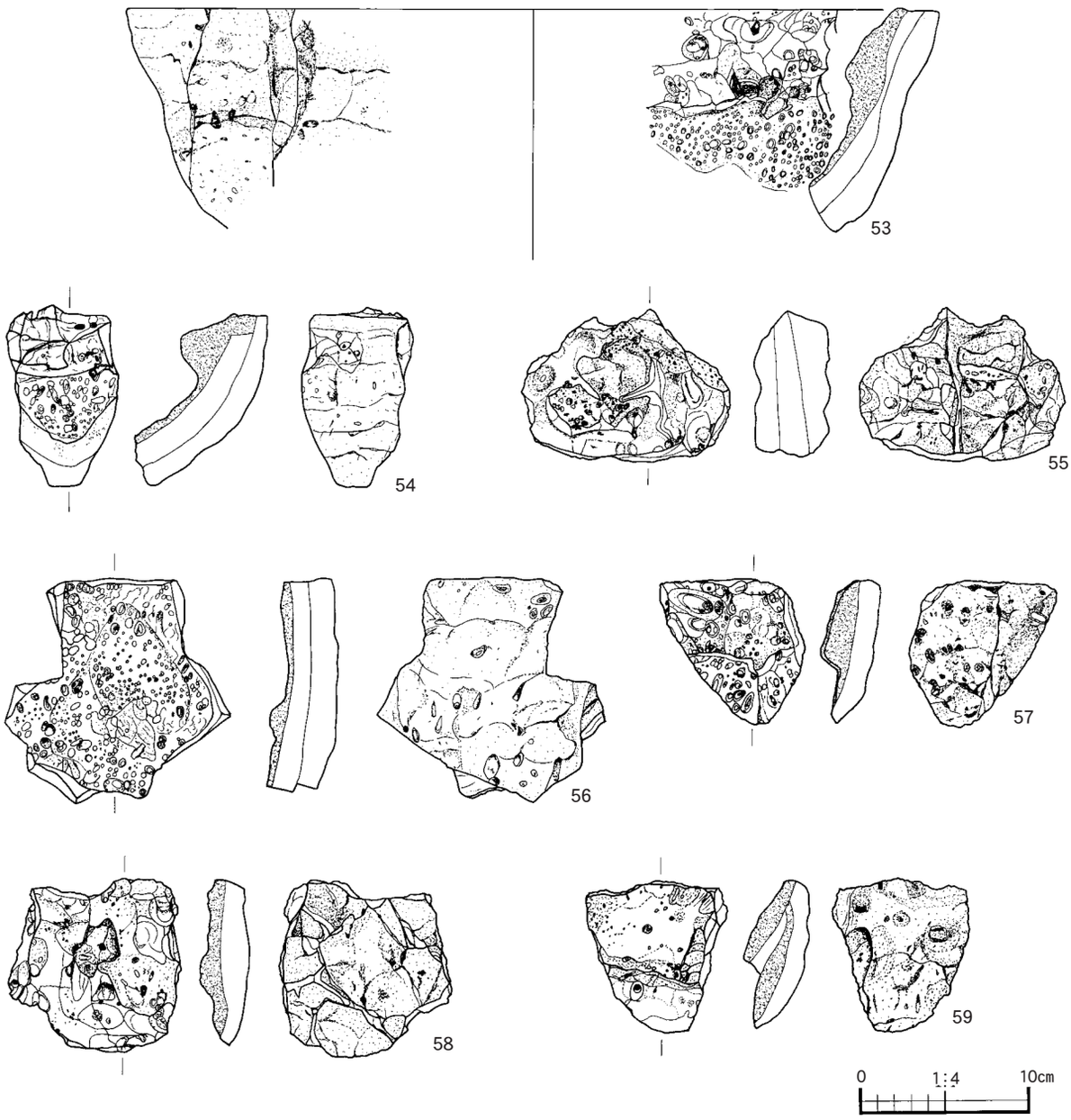
第16図は中世以前の遺物を取り上げた。主に埋没谷内から出土している。摩滅したものが多く，図示できるものは少ない。１～７は縄文土器である。１は関山Ⅰ式土器，２は浮島式土器であり，波状貝殻文を持つ。３～５は前期後半，６は前期末に属すると考えられる。７は後期加曽利Ｂ３～曽谷式土器の深鉢である。８は弥生時代後期土器の複合口縁，９は格子目叩きを持つ奈良・平安時代の瓦と考えられる。10は胎土から近世土器と考えられるが小片のため器種不明である。11，12，14は磨石，13は敲石，15は打製石斧，16は尖頭器，17はナイフ形石器もしくは削器であるが刃部は欠損している。その他土師器・須恵器片も出土しているが小片のため図示し得なかった。



第13図　出土遺物（中世）①



第14図　出土遺物（中世）②



第15図　出土遺物（中世）③

番号	器種	出土遺構・区	法量（cm）	焼成	色調	胎土	産地	備考
1	蓮弁文碗	５Ｂ－ｂ	口径　(14.0) 底径　－ 器高　－	良好	10Y6/2オリーブ灰	緻密	龍泉窯	口縁部 Ｉ－５類
2	劃花文碗	５Ｂ－ｂ	口径　－ 底径　(7.0) 器高　－	良好	7.5Y6/2灰オリーブ	緻密	龍泉窯	底部 Ｉ－２類
3	かわらけ	５Ａ－ｂ	口径　(10.8) 底径　(5.3) 器高　2.9	良好	7.5YR6/6　橙	砂粒を少し含む		底部回転糸切り
4	かわらけ	１号地下式坑 ５Ａ－ｂ	口径　(10.4) 底径　(5.6) 器高　2.7	良好	10YR6/6明赤褐	砂粒を少し含む		底部回転糸切り
5	かわらけ	６号土坑	口径　7.7 底径　4.3 器高　1.9	良好	10YR6/3にぶい黄橙	砂粒を少し含む		完形 底部回転糸切り 口縁部油煙付着

第１表　陶磁器観察表（１）

番号	器種	出土遺構・区	法量（cm）	焼成	色調	胎土	産地	備考
6	かわらけ	6号土坑	口径 7.6 底径 4.3 器高 2.0	良好	10YR6/3にぶい黄橙	砂粒を少し含む		完形 底部回転糸切り 口縁部油煙付着
7	縁釉皿	5A－b	口径 (11.6) 底径 － 器高 －	良好	7.5Y6/2灰オリーブ	緻密	瀬戸窯	口縁部 後Ⅳ期新段階
8	縁釉皿	5A－b	口径 － 底径 － 器高 －	良好	7.5Y5/2灰オリーブ	緻密	瀬戸窯	口縁部 後Ⅳ期新段階
9	腰折皿	3C－c	口径 － 底径 － 器高 －	良好	7.5Y6/2灰オリーブ	緻密	瀬戸窯	底部 後Ⅳ期新段階
10	盤類	4B－c	口径 － 底径 (12.0) 器高 －	良好	5Y6/2灰オリーブ	砂粒を少し含む	瀬戸窯	後Ⅲ～Ⅳ期
11	卸目付大皿	4A－d	口径 (32.8) 底径 (9.6) 器高 (8.5)	良好	7.5Y4/2灰オリーブ	砂粒を少し含む	瀬戸窯	後Ⅳ期古段階
12	梅瓶	4号溝	口径 － 底径 8.8 器高 －	良好	7.5Y5/2灰オリーブ	砂粒を少し含む	常滑窯	底部 中期
13	片口鉢	4C－a	口径 － 底径 － 器高 －	良好	5Y6/1灰	砂粒を少し含む	常滑窯	高台
14	片口鉢	4B－c	底径 － 口径 (25.6) 底径 －	良好	5Y6/1灰	砂粒を少し含む		底部付近
15	擂鉢	6号土坑 5A－b	器高 － 口径 － 底径 －	良好	5Y6/1灰	砂粒を少し含む		口縁部 擂目6条
16	擂鉢	5A－b	器高 － 口径 － 底径 －	良好	10YR4/2灰黄褐	砂粒を少し含む	常滑窯	口縁部
17	壺	5C－a	器高 － 口径 (27.0) 底径 －	良好	5Y4/2灰オリーブ	黒色粒子を少し含む	常滑窯	胴部
18	片口鉢	4B－d	器高 － 口径 － 底径 －	良好	5Y6/1灰	砂粒をかなり含む	常滑窯	口縁部 6a型式
19	片口鉢	3B－b	器高 － 口径 － 底径 －	良好	7.5YR4/6褐	砂粒をかなり含む	常滑窯	口縁部 9型式
20	片口鉢	14号土坑	器高 － 口径 － 底径 －	良好	7.5YR5/3にぶい褐	砂粒をかなり含む	常滑窯	底部付近
21	甕	6号土坑	器高 － 口径 － 底径 －	良好	7.5YR6/8橙	砂粒をかなり含む	常滑窯	口縁部 9型式
22	甕	6号土坑	器高 － 口径 － 底径 －	良好	7.5YR4/2灰褐	砂粒をかなり含む	常滑窯	口縁部 9型式
23	甕	5A－d	器高 － 口径 － 底径 －	良好	7.5YR4/3褐	砂粒を少し含む	常滑窯	口縁部 10型式
24	甕	4B－d	器高 － 口径 － 底径 －	良好	7.5YR3/2黒褐	砂粒を少し含む	常滑窯	口縁部 6a型式
25	甕	3号溝	器高 － 口径 － 底径 －	良好	7.5YR5/3にぶい褐	砂粒を少し含む	常滑窯	胴部
26	甕	5B－b	器高 － 口径 － 底径 －	良好	2.5Y6/3にぶい黄	砂粒を少し含む	常滑窯	胴部
27	甕	6号土坑	器高 － 口径 － 底径 －	良好	7.5YR3/2黒褐	砂粒を多く含む	常滑窯	胴部
28	甕	6号土坑	器高 － 口径 － 底径 －	良好	7.5YR4/1褐灰	砂粒を少し含む	常滑窯	胴部

第2表　陶磁器観察表（2）

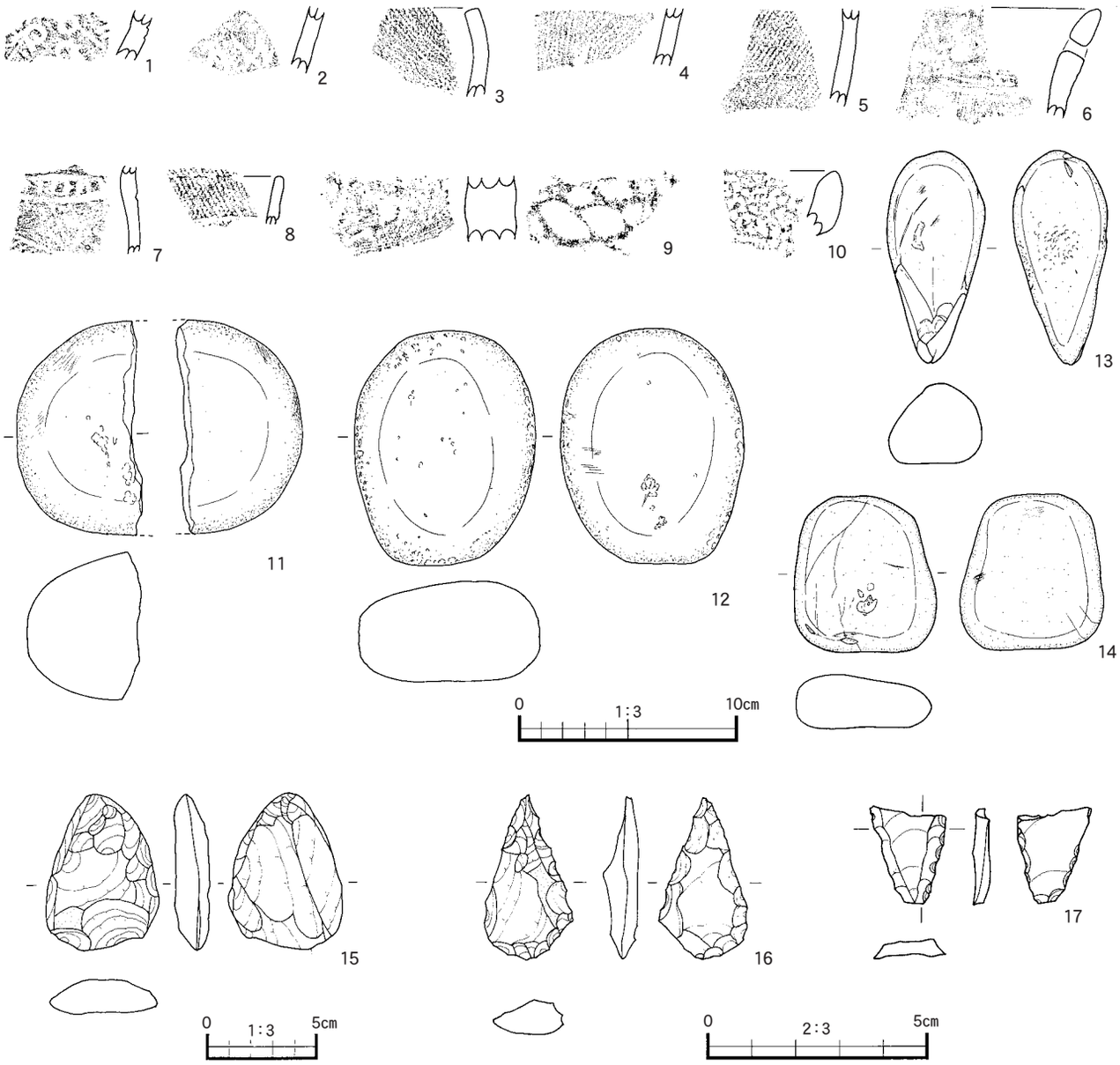
番号	器種	出土遺構・区	法量（cm）	焼成	色調	胎土	産地	備考
29	甕	４Ｃ－ｃ	口径　－ 底径　－ 器高　－	良好	2.5Y7/4浅黄	黒色粒子を多く含む	常滑窯	胴部
30	甕	１号地下式坑	口径　－ 底径　－ 器高　－	良好	2.5Y6/2灰黄	砂粒を少し含む	常滑窯	胴部
31	甕	５Ｂ－ｂ	口径　－ 底径　－ 器高　－	良好	2.5Y5/4黄褐	砂粒を多く含む	常滑窯	底部
32	甕	４Ｂ－ｄ ５Ｂ－ｂ	口径　－ 底径　－ 器高　－	良好	2.5Y6/4にぶい黄	砂粒を多く含む	常滑窯	胴部
33	甕	５Ｂ－ｂ	口径　－ 底径　－ 器高　－	良好	10YR3/2黒褐	砂粒を多く含む	常滑窯	底部
34	甕	６号土坑 ５Ｂ－ｂ	口径　－ 底径　19.2 器高　－	良好	5YR3/6暗赤褐	砂粒を多く含む	常滑窯	底部
35	内耳土器	２号地下式坑	口径　－ 底径　－ 器高　－	良好	7.5YR3/2黒褐	砂粒を多く含む		口縁部 外面煤付着
36	内耳土器	６Ａ－ｂ	口径　－ 底径　－ 器高　－	良好	7.5YR4/1褐灰	砂粒を多く含む		口縁部
37	内耳土器	５Ａ－ｄ	口径　－ 底径　－ 器高　－	良好	7.5YR4/3褐	砂粒を多く含む		口縁部
38	内耳土器	７号土坑	口径　－ 底径　－ 器高　－	良好	7.5YR4/3褐	砂粒を多く含む		口縁部
39	内耳土器	４Ａ－ｄ	器高　－ 口径　－ 底径　－	良好	7.5YR3/1黒褐	砂粒を多く含む		口縁部
40	内耳土器	５Ａ－ｄ	器高　－ 口径　－ 底径　－	良好	2.5Y5/2暗黄灰	黒色粒子を多く含む		口縁部
41	内耳土器	５Ａ－ｄ	口径　－ 底径　－ 器高　－	良好	N3/ 暗灰	砂粒を多く含む		底部
42	火鉢	６号土坑	器高　－ 口径　－ 底径　－	良好	N3/ 暗灰	砂粒を多く含む		体部
43	筒型容器	６号土坑	口径　15.4 底径　12.2 器高　14.6	良好	7.5Y4/2灰オリーブ	緻密	瀬戸窯	後Ⅳ期古段階 Ｈ７　２号地下式坑出土品と同一個体か

第３表　陶磁器観察表（３）

番号	器種	出土遺構・区	長さ(cm)	幅（cm）	厚さ(cm)	重量(ｇ)	石材	備考
46	砥石	８号土坑	［１０．４］	２．５	３．３	［１０３］		欠損
47	砥石	３号溝	［　８．４］	４．５	２．８	［１２１］	凝灰岩	欠損
48	砥石	４号溝	［　３．３］	３．０	１．５	［１８］	凝灰岩	欠損
49	砥石	４号溝	［　４．６］	２．５	２．５	［３６］	凝灰岩	欠損
50	砥石	４号溝	［　４．７］	３．０	２．８	［４２］	凝灰岩	欠損
51	砥石	４号溝	［　４．６］	２．８	１．８	［２７］	凝灰岩	欠損
52	砥石	２Ｂ－ｂ	［　５．９］	４．１	１．８	［６１］	凝灰岩	欠損

［　　］は残存値

第４表　石製品観察表



第16図　調査区出土遺物

番号	器種	出土遺構・区	長さ(cm)	幅 (cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石材	備考
11	磨石	6号土坑	9．7	5．2	[6．6]	[459]	石英斑岩	欠損
12	磨石	3号地下式坑	10．6	8．2	4．4	628	砂岩	敲打痕あり
13	敲石	4A－d	9．6	4．4	3．6	198	砂岩	
14	磨石	6号土坑	7．0	6．4	2．4	203	安山岩	
15	打製石斧	6号土坑	7．1	5．2	1．5	76.2	安山岩	
16	尖頭器	4C－b	3．6	2．1	0．8	5.0	安山岩	
17	ナイフ形石器	3号溝	[2．2]	1．7	0．4	[1.7]	メノウ	刃部欠損

[　　] は残存値

第5表　石器観察表

4　まとめ

今回の調査では，平成13年度にすでに一部については報告済みであるが，一連の遺構群であるため，あわせて主に中世遺構群についてまとめと若干の考察を加えたい。

遺構は中世屋敷跡に伴うものがほとんどと考えられ，遺構数は，掘立柱建物跡２棟，竪穴状遺構１基，地下式坑６基，土坑24基，溝６条，区画１ヶ所である。

そのうち屋敷跡では掘立柱建物跡２棟，地下式坑６基，土坑20基，溝１条が検出されている。掘立柱建物跡は，既報告分の屋敷東側のピット群に南北２棟の掘立柱建物跡が想定され（第８図），その他にも存在していた可能性がある。

地下式坑は，機能について墓ないしは宗教関連施設とする説と倉庫説の二説が主なものであるが，今回の調査で検出された地下式坑の性格は，墓壙・火葬跡や板碑・五輪塔といった墓地や寺院を想定できる遺構や遺物が他に認められないため倉庫と考えている。２～４号地下式坑が１群をなしており，１号地下式坑と東側の１群と全部で３群に分けられそうである。

溝は，主に谷から通じる通路として利用されていたと考えられ，台地上では各溝が平行して検出されており，また１号区画も同じ向きで検出されていることからある一定の方向性を持って形成されている。

出土遺物については，大きく13世紀代と15世紀後半の２時期に分かれる。瀬戸窯製品は出土点数は少ないが，１点が中期のもの以外は後Ⅳ期が主体を占め，大窯製品は出土していない。常滑窯製品は５～６ａ型式の一群と間を置いて９～10型式のものが出土している。かわらけ，擂鉢，内耳土器といった在地製品はおおむね15世紀後半～16世紀初頭に位置づけられる。

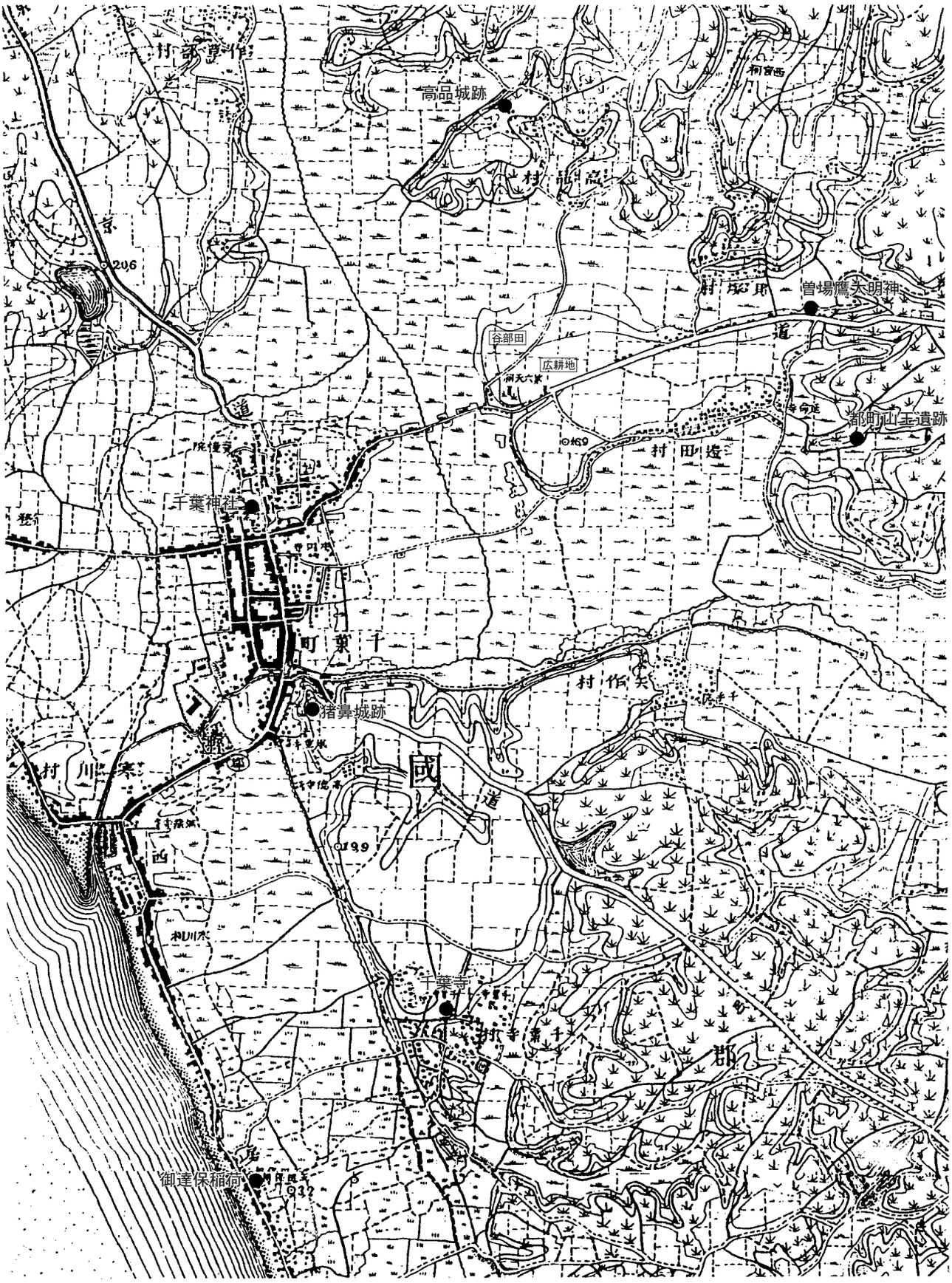
また，今回の調査では溶解炉の炉壁片が埋没谷覆土内から多く出土している。しかし，羽口や鋳型などの遺物は出土せず，鋳造遺構も検出できなかったため，どのような経緯でもたらされたかは不明であるが，付近に鋳造遺構が存在していた可能性が高く，従来あまり知られていなかった中世下総鋳物師の存在の一端が明らかとなった。

また，前述したように西側隣接地は平成７年度に発掘調査が実施されており，今回の調査と密接な関係にあると思われるので概略を述べたい。（第19図）

北東部分が未調査であるため総遺構数は増加することが予想されるが，テラス状に造成された部分を主体に地下式坑13基，土坑57基が検出され，地下式坑はテラスの平坦面を囲むように展開している。テラスの平坦面の規模は東西約43m，南北約 30m，面積は約900㎡である。報告時では遺構群の性格について地下式坑の存在から墓地または貯蔵施設としている。

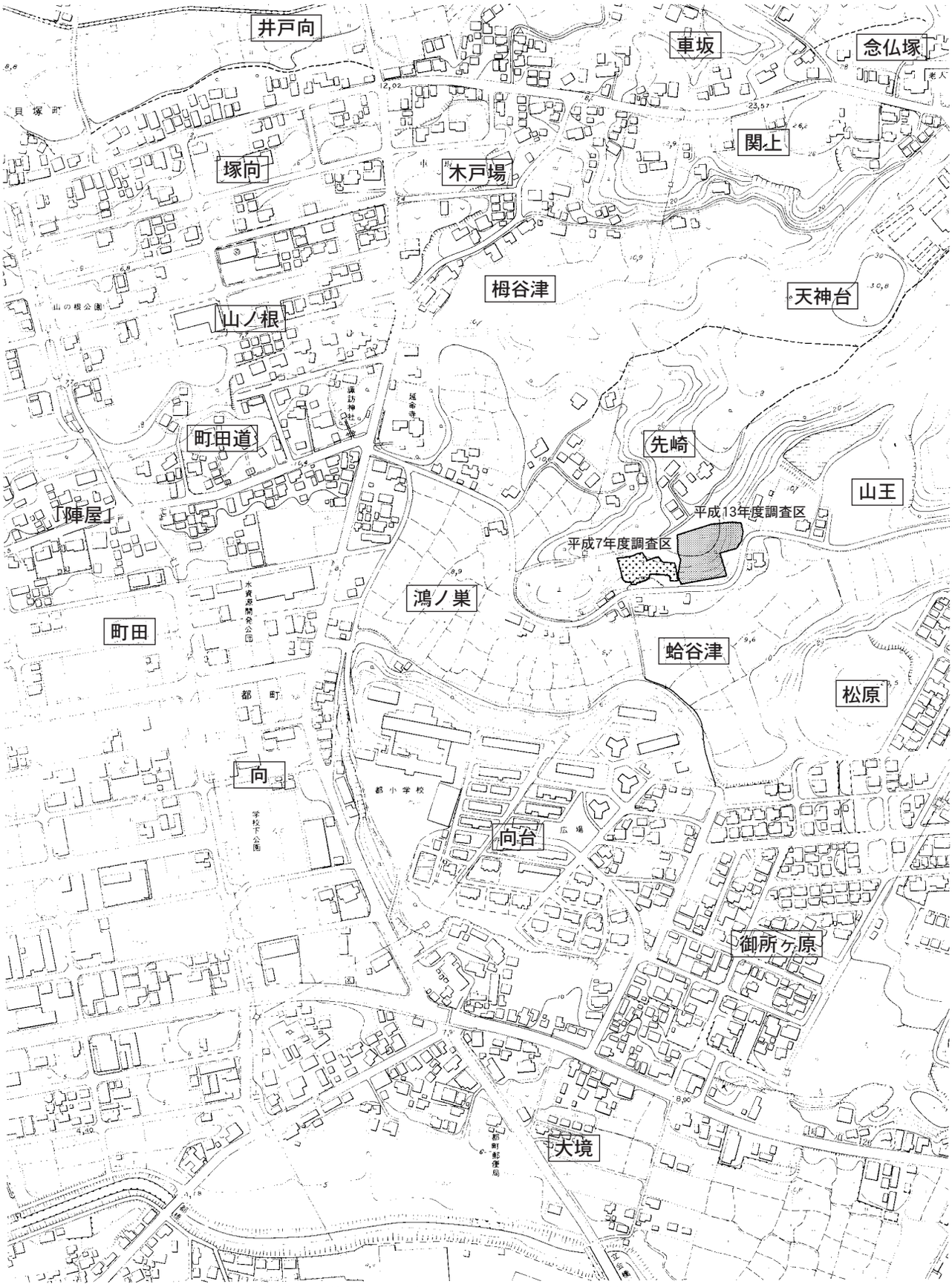
地下式坑の中には上面部が削平されたものがあるため，屋敷地の拡張は最低１回は行われていると考えられる。地下式坑は壁際に出入口をつくり，壁の奥に主室が掘り込まれるものと平坦面に出入口をつくり，主室を下に深く掘り込む２種類が認められる。掘立柱建物跡は検出されていないが，確認調査段階ではピットがいくつか検出されているためおそらく存在したと思われる。

出土遺物は，在地産のかわらけ・擂鉢・内耳土器や青磁碗，瀬戸窯縁釉皿・平碗・擂鉢・祖母懐壺・茶壺・花瓶，常滑窯片口鉢・甕といった陶磁器や砥石，茶臼といった石製品であるが，出土量は今回の調査より多い。特筆すべき遺物としては，12 号地下式坑出土の内耳鉄鍋がある。



□は小字

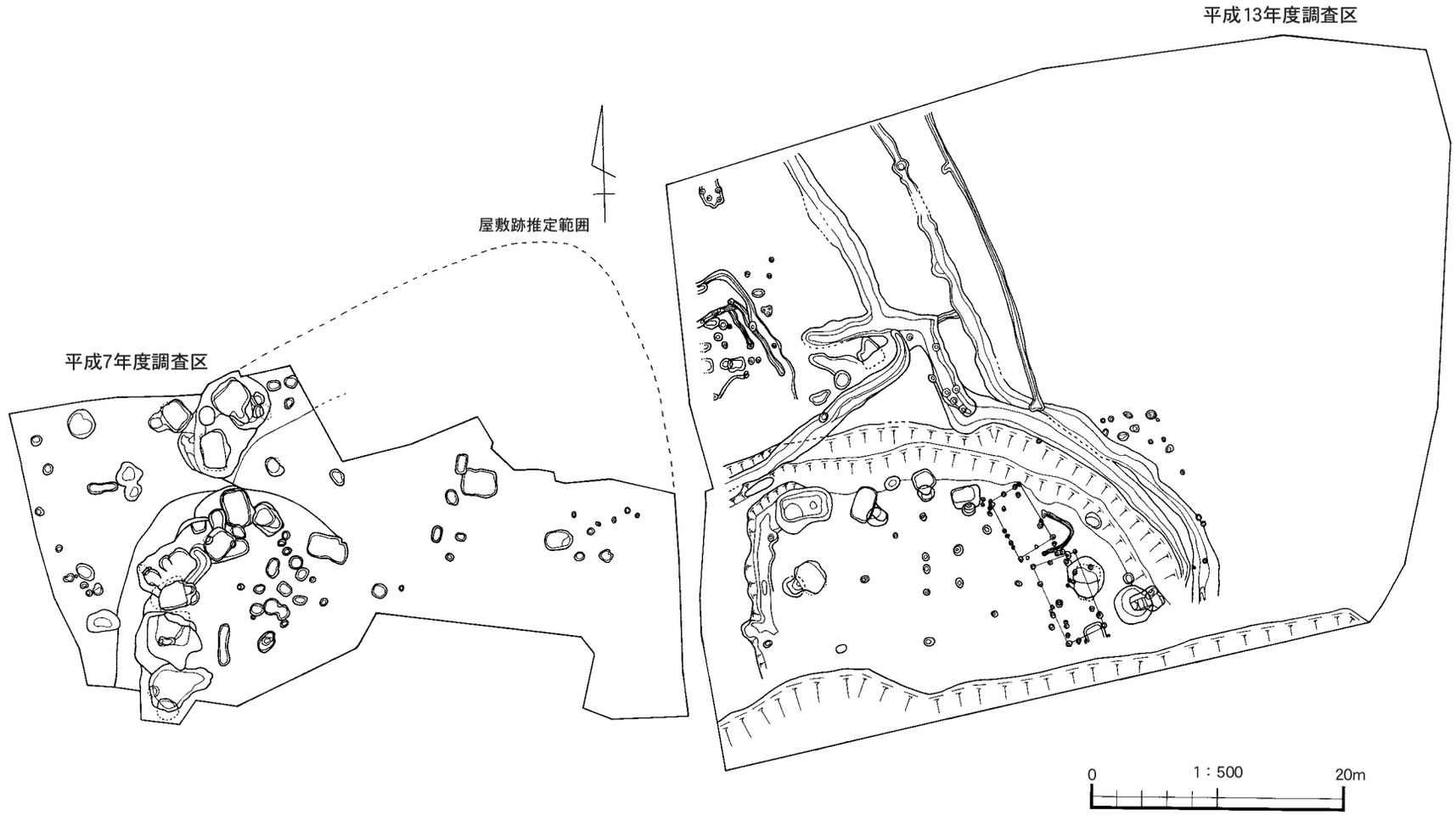
第17図　中世関連地形図（1／20,000）



千葉市昭和45年12月測図（1/2,500）を使用

□ は小字

第18図　都町山王遺跡周辺地形図（1 ／ 5,000）



第19図　平成７年度・13年度遺構配置図

組成表（第７表）からは，瀬戸窯製品は中期～後Ⅳ期新段階まで見られ，特に後Ⅳ期新段階が多く出土しているが，大窯製品は出土していないことがわかる。常滑窯製品は，５～６ａ型式の一群と９，10型式のものとに大きく分けられる。また，全体的には在地製品が半数以上を占め，常滑窯製品が約1/3 を占める。用途別では，内耳土器・擂鉢といった調理具が約半数を占め，貯蔵具，供膳具が約1/4 ずつを占める。

中世千葉の景観については中世末期に著された『千学集抜粋』によると貝塚町にあった曾場鷹大明神（現存せず）から稲荷町にある御達報稲荷までが宿の範囲とされ，曾場鷹大明神から広小路（広耕地）・谷部田にかけては国中の諸侍の屋敷があったとされている。（第17図）これに従えば，都町山王遺跡は宿のはずれに位置することとなる。中世辺田村については，『千学集抜粋』には「神（妙見宮）領辺田」との記載があり，当地に比定されている。また，深川元儁が天保年間に著した『房総三州漫録』によると「辺田に陣屋という地あり，空堀の迹あり，一反ばかり，今，竹林なり」と記載されている。現在ではその痕跡をうかがい知ることはできないが，「陣屋」という地名は，バス停名に残っており，周辺に館の存在が想定される。（第18図）

辺田村の成り立ちは，遺構としては明確ではないが，13世紀代の遺物が見られることからこの頃から形跡が見出される。その後空白期間をはさむが，15世紀後半には今回の調査区や平成７年度調査区は屋敷として使用されたことが明らかとなった。ただし，これらの屋敷は16世紀に入ると使われなくなり，以後近年に至るまで顧みられることはなかった。

①瀬戸製品

器種	梅瓶	花瓶		折縁深皿	卸皿	盤類	卸目付大皿	擂鉢			平碗		縁釉小皿	腰折皿	茶壺	祖母懐茶壺	鉢	筒形容器	不明
区分	中期	後期	後Ⅰ・Ⅱ	中Ⅰ	中期	後Ⅲ・Ⅳ	後Ⅳ古	後Ⅳ	後Ⅳ新	後～	後Ⅲ・Ⅳ	後Ⅳ新	後Ⅳ新	後Ⅳ新	後期	後期	７型	後Ⅳ古	後期
H７年度		1	3	1	1			3	5	2	2	1	3		1	5		1	2
H13年度	1					1	1						2	1			1	1	
計	1	1	3	1	1	1	1	3	5	2	2	1	5	1	1	5	1	2	2

②常滑製品・貿易・在地製品他　　＊　～６ａ型式はいわゆる山茶碗窯の鉢

器種	常滑鉢							常滑甕					常滑壺	青磁碗			備前	在地			計
区分	５型	～６ａ型	６ａ型	７型	８型	９型	破片	５型	６ａ型	９型	10型	破片		Ⅰ-2類	Ⅰ-5類	無文	擂鉢	カワラケ	内耳	擂鉢	
H７年度		1			1				1		1	19	1		1	2	1	39	69	25	192
H13年度	1	4	3			1	1	1	1	2	1	63	5	1	1			16	15	13	137
計	1	5	3	0	1	1	1	1	2	2	2	82	6	1	2	2	1	55	84	38	329

③瀬戸製品時期別点数

区分	中期	７型式	後Ⅰ・Ⅱ	後Ⅲ・Ⅳ	後Ⅳ	後Ⅳ古	後Ⅳ新	後期
点数	3	1	3	3	3	3	12	11

④常滑製品時期別点数

区分	５型式	～６ａ型式	６ａ型式	７型式	８型式	９型式	10型式
点数	2	5	5	0	1	3	2

⑤組成表

産　地	瀬　　戸					常　滑			備前	中国	在　　地			計
種　別	瓶壺	皿・盤類	碗	擂鉢	その他	鉢	甕	壺	擂鉢	青磁	カワラケ	内耳土器	土器擂鉢	
点　数	11	11	3	10	4	12	89	6	1	5	55	84	38	329
比率(%)	3.3	3.3	0.9	3.0	1.2	3.6	27.1	1.8	0.3	1.5	16.7	25.5	11.6	99.8
比率(%)	11.9					32.5			0.3	1.5	53.8			100

第６表　中世遺物組成表

Ⅱ　居寒台遺跡

1　調査に至る経緯と調査の概要

幕張町弁天町線整備事業に伴い，千葉市花見川区浪花町地先2,520㎡について千葉市長松井　旭より千葉市教育委員会教育長宛に「埋蔵文化財の所在の有無及びその取り扱いについて」の照会が平成12年10月５日付で提出された。周辺では過去に発掘調査が実施されており，照会地にも遺構の広がりが予想されるため，照会地全域について「遺跡の所在する」旨の回答を平成13年２月６日付で行った。

協議の結果，記録保存のための発掘調査を実施することとなり，市教育委員会の委託を受けた財団法人千葉市文化財調査協会が確認・本調査を実施することとなった。

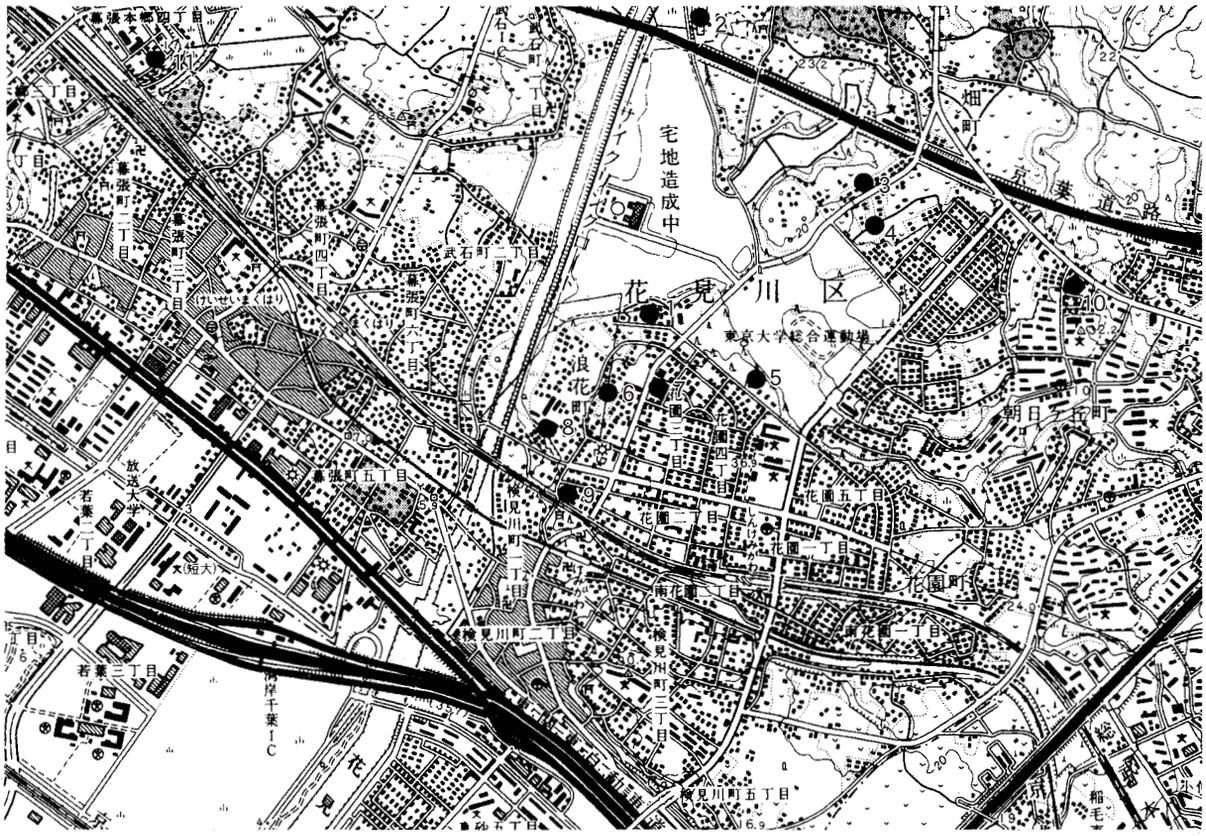
今回の調査では，調査区内に設置されているコンクリート杭を基準に北から南にアルファベットのＡ～Ｅを，西から東には算用数字の８～15を振り，10m毎のグリッドを設定した。さらに各グリッドを５m四方の小グリッドに分割し，各々ａ～ｄを振り，北東杭を基準として例えば「８Ａ－ａ」というふうに呼称し，これをもとに遺構実測・遺物取り上げを実施した。

2　遺跡の位置と環境

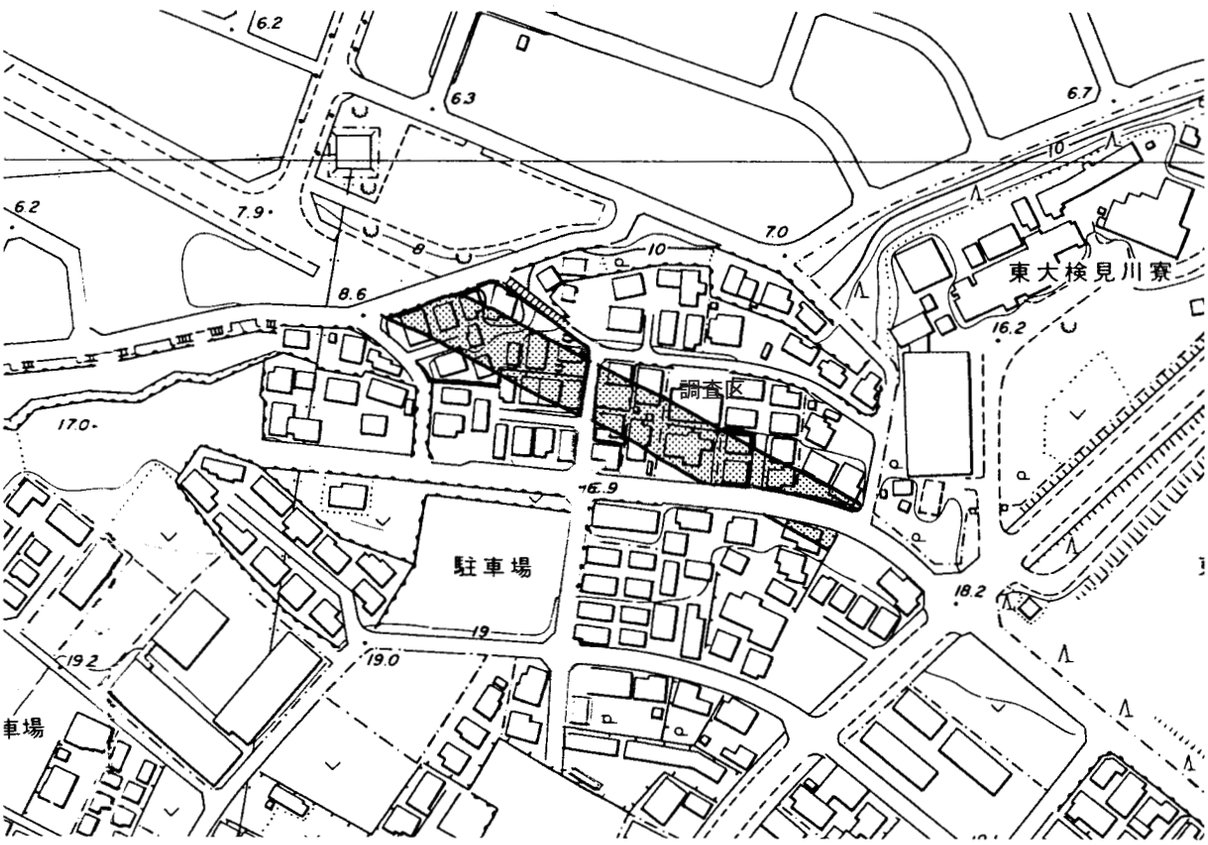
居寒台遺跡は千葉市の北西部，ＪＲ総武線新検見川駅から北北西に約800m，印旛沼の東京湾への放水路として開削された花見川の下流域，花見川本谷と鶴牧支谷に挟まれ北西に張り出す台地上に所在する。標高は18～20mであり，旧水田面からの比高差は14～16mである。

本遺跡の周辺には多くの遺跡が所在しており，過去に調査歴のある遺跡も少なくない。玄蕃所遺跡（第20図５）は平成６年度に発掘調査が行われ，細石刃を伴う石器ブロック１ヶ所，縄文時代前期住居跡１軒，平安時代住居跡１軒などが検出された。居寒台遺跡と同一台地上には，平成３，６年度に発掘調査が実施され，あわせて古墳～平安時代住居跡22軒，掘立柱建物跡20棟が検出された直道遺跡（同図６），平成３年度の発掘調査により，奈良時代住居跡１軒を検出した横塚遺跡（同図７），平成元年度に発掘調査が実施され，奈良時代住居跡が１軒検出された大久保貝塚（同図８），平成10年度に確認調査が行われ，古墳～平安時代住居跡が８軒検出された瓜堀込遺跡（同図９）が所在する。

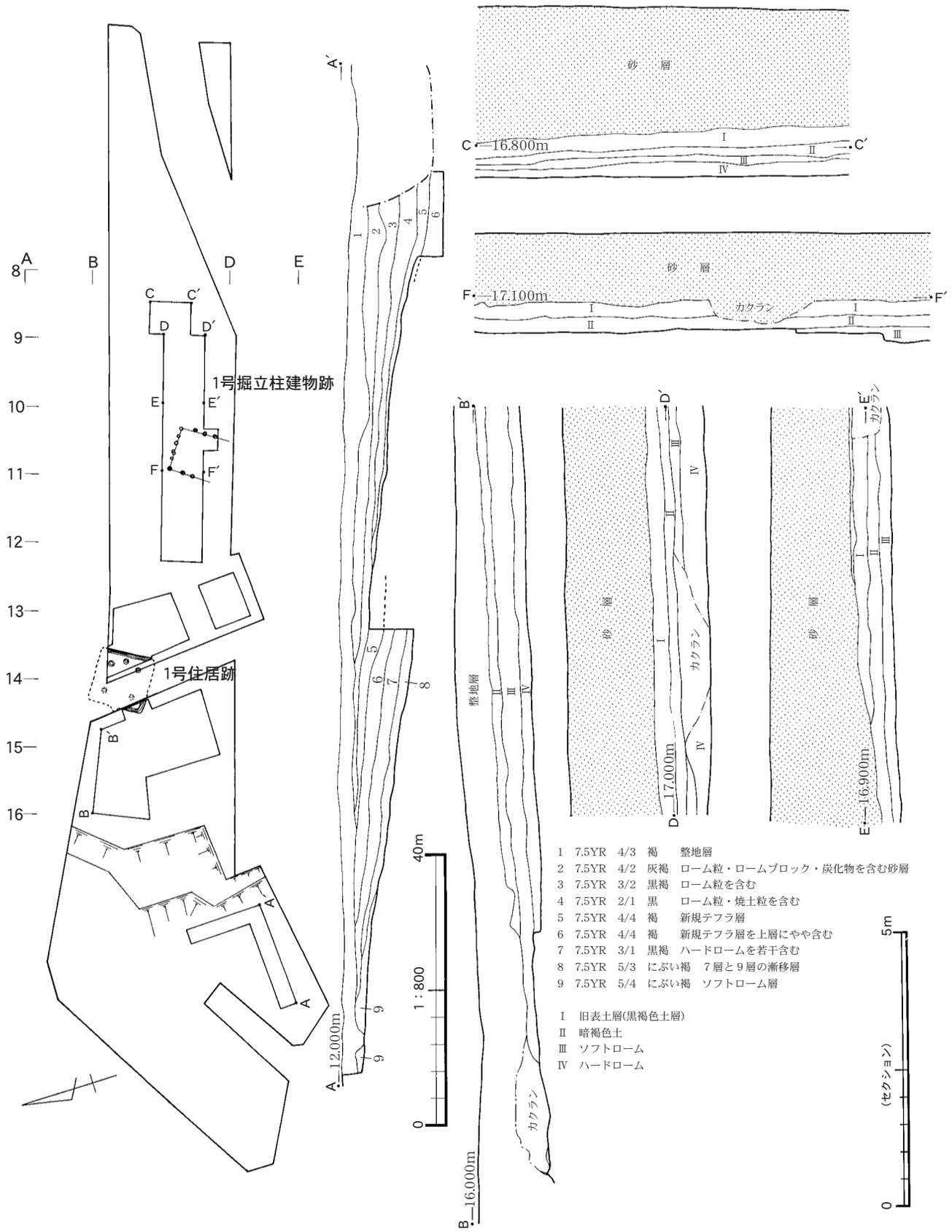
鶴牧支谷の北側の台地では，平成５年度に発掘調査が実施され，古墳時代前期住居跡１軒，中期住居跡１軒，後期住居跡２軒，奈良時代住居跡２軒が検出された上鶴牧遺跡（同図４），平成10年度に発掘調査が実施された御林遺跡（同図３）では，古墳時代中期住居跡１軒，奈良時代住居跡５軒が検出されている。その北には昭和47年度に発掘調査が実施され，古墳時代前期住居跡２軒，中期10軒，平安時代住居跡１軒などを検出した宮脇遺跡（同図２）がある。また，鶴牧支谷の最奥部に所在する蓑輪遺跡（同図10）では，昭和58年度に発掘調査が実施され，ナイフ形石器を伴う石器ブロック２ヶ所，古墳時代前期住居跡９軒，中期住居跡11軒，奈良時代火葬墓２基などが検出されている。また，花見川本谷をへだてた北西約２㎞先には古墳時代後期を主体とする300軒以上の住居跡が検出された上ノ台遺跡（同図11）が所在する。



第20図　居寒台遺跡の位置と周辺遺跡（1／25,000 千葉西部）



第21図　居寒台遺跡地形図（1／2,500）



第22図　居寒台遺跡遺構配置図・土層断面図

3　検出された遺構と遺物

発掘調査は，遺構確認面までの砂の堆積が著しいため，周辺への安全を考慮し，任意にトレンチを設定し，表土除去後，清掃作業を実施して遺構が検出された部分について拡張し精査した。その結果，古墳時代後期の竪穴住居跡１軒と時期不明の掘立柱建物跡１棟を検出した。（第22図）

(1) 竪穴住居跡

１号住居跡（第23図）

調査区中央の13Ｂ－ｃ，ｄ，14Ｂ－ｂグリッドで検出された。遺構の中央を現道が横切るため完掘はできなかった。形態は方形であり，推定規模８ｍ，壁高0.42～0.54ｍを測る。主軸方位はＮ－55°－Ｗを示す。床面はハードローム中にあり平坦である。周溝は発掘部分では検出され，幅0.2～0.28ｍ，深さ0.02～0.04ｍを測る。柱穴は２カ所のみ検出されたがおそらく主柱穴４本と出入口のピット１本をもつと考えられる。P-1は主柱穴であり径0.72×0.70ｍ，深さ0.84ｍ，P-2は出入口のピットと考えられ，径0.46×0.37ｍ，深さ0.16ｍを測る。P-2の周囲に幅0.16ｍ，深さ0.02ｍの溝が「ハ」の字状に検出された。カマドは今回の調査では検出されず，P-2の向かい側，現道下にあると考えられる。

出土遺物は11点を図示した。（第24図１～11）５はP-1の上層より，１～４，６は床面から約0.15ｍ上層で出土した。２は埼玉県北部から群馬県平野部を中心に分布する有段口縁坏である。３，５は，器厚が薄いのが特徴であり，同地域からもたされたものと考えられる。７は土錘の破片，８から11は軽石である。その他小片のため図示できなかったが，赤彩された土師器坏，須恵器坏蓋，甕などが出土している。

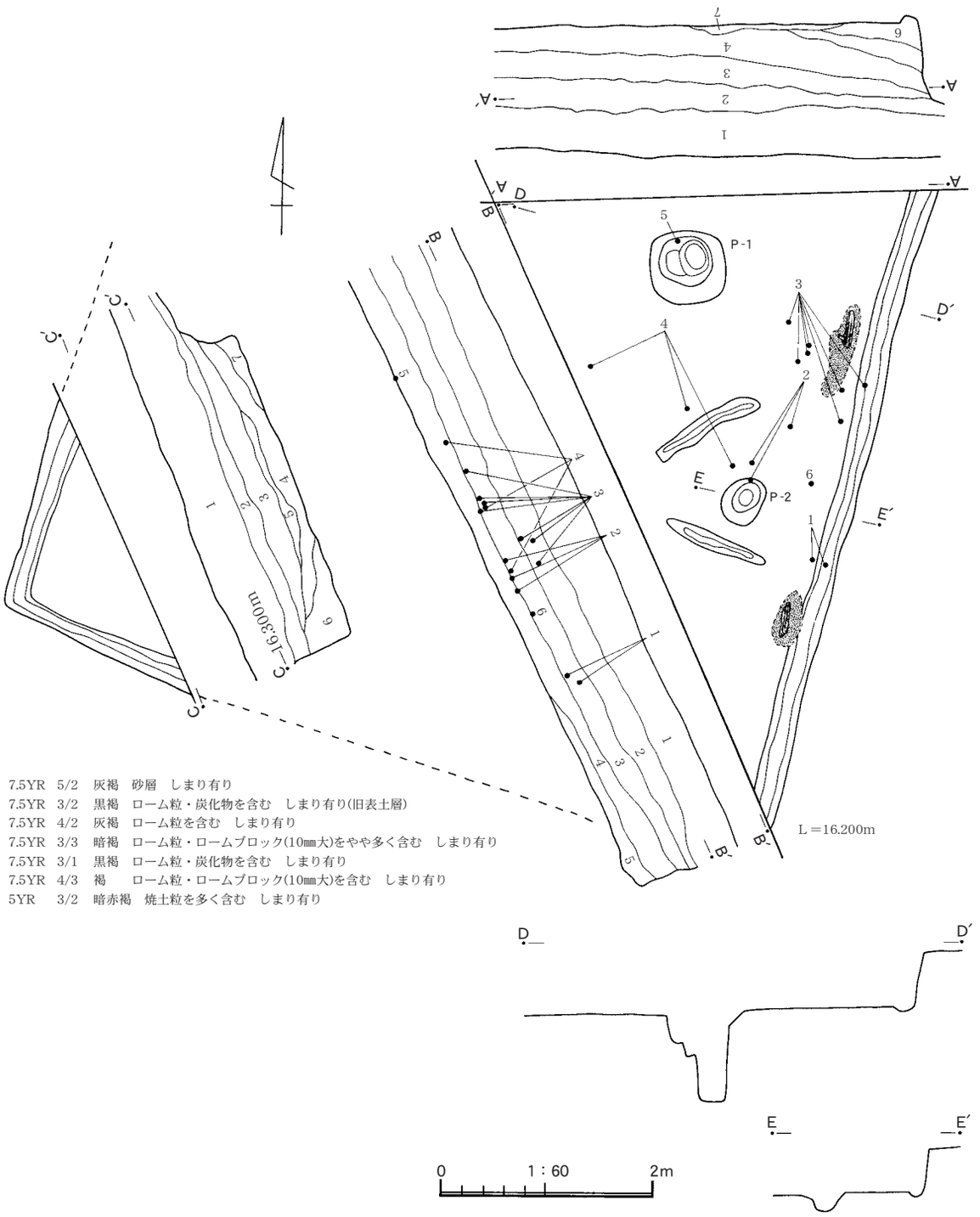
(2) 掘立柱建物跡

１号掘立柱建物跡（第25図）

調査区中央の10Ｃ，11Ｃ－ａグリッドで検出された。遺構の南側は砂層が厚く，法面をつくらねばならなかったため完掘できなかった。規模は５間（6.96ｍ）×３間（4.90ｍ）以上の南北棟と考えられる。主軸方位はＮ－38°－Ｅである。梁行1.04～1.48ｍ，桁行1.35～2.10ｍを測る。遺構の時期は，遺物が出土しなかったため不明である。

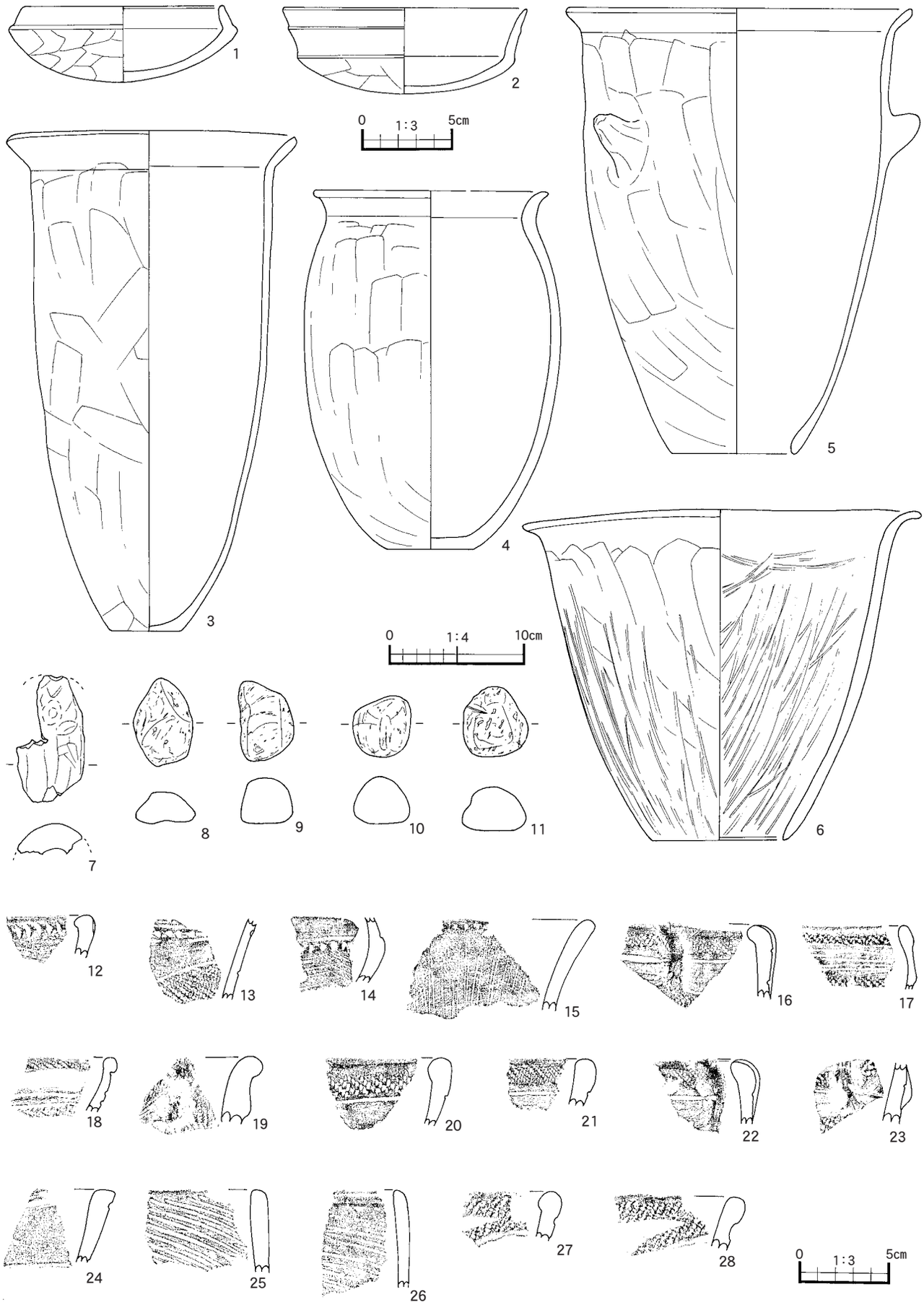
(3) 調査区出土遺物

調査区からは縄文時代後晩期の土器片が出土している。そのうち主なものを図示した。（第24図12～28）12～14は加曽利Ｂ３～曽谷式，15～23は安行１式，24～26は安行３ｂ式併行（姥山Ⅱ式），27・28は前浦式である。また，近世陶磁器も若干出土している。



1　7.5YR　5/2　灰褐　砂層　しまり有り
2　7.5YR　3/2　黒褐　ローム粒・炭化物を含む　しまり有り(旧表土層)
3　7.5YR　4/2　灰褐　ローム粒を含む　しまり有り
4　7.5YR　3/3　暗褐　ローム粒・ロームブロック(10mm大)をやや多く含む　しまり有り
5　7.5YR　3/1　黒褐　ローム粒・炭化物を含む　しまり有り
6　7.5YR　4/3　褐　ローム粒・ロームブロック(10mm大)を含む　しまり有り
7　5YR　3/2　暗赤褐　焼土粒を多く含む　しまり有り

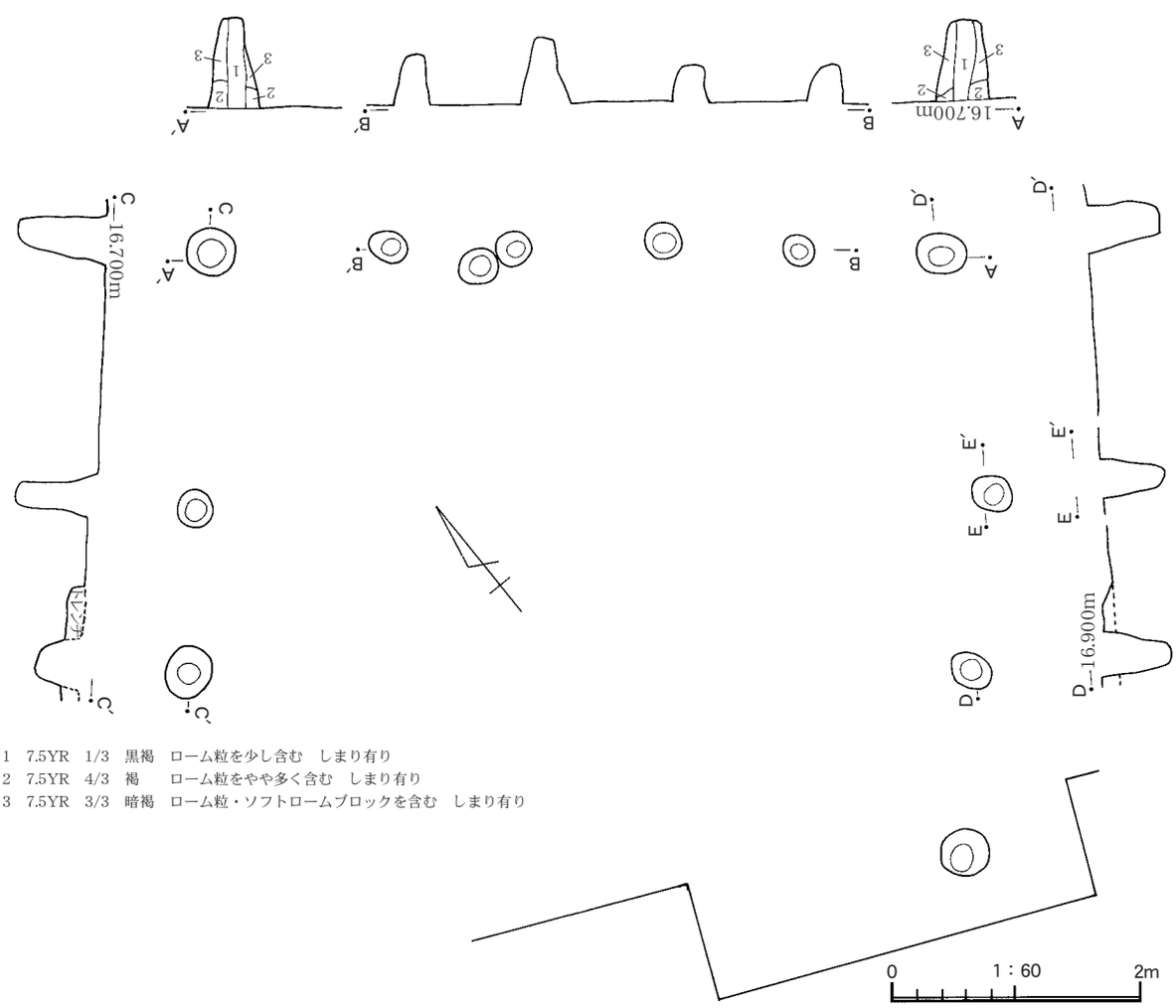
第23図　１号住居跡



第24図　1号住居跡・調査区出土遺物

番号	器種	法量（cm）	器形の特徴	成形・調整の特徴	胎土・色調・焼成	備考
1	土師器坏	口径　11.2 底径　－ 器高　4.1	口縁部内傾する	口縁部・内面なで 底部ヘラ削り	粗め 5YR3/1　黒褐 良好	完形
2	土師器坏	口径　13.6 底径　－ 器高　4.8	口縁部段をもち，緩く外反する	口縁部・内面なで 底部ヘラ削り	細かい　赤色粒子多く含む 5YR6/6　橙 良好	90％
3	土師器甕	口径　21.7 底径　5.2 器高　37.2	口縁部外反する	口縁部なで 体部縦方向ヘラ削り後 斜方向ヘラ削り	粗め　赤色粒子含む 7.5YR6/3　にぶい褐 良好	80％
4	土師器甕	口径　(17.5) 底径　6.6 器高　26.6	口縁部短く外反する	口縁部なで 体部縦方向ヘラ削り	粗め 5YR5/3　にぶい赤褐 良好	60％
5	土師器甑	口径　30.0 底径　9.2 器高　33.0	口縁部短く外反する 把手一対	口縁部なで 体部縦方向・底部付近斜方向ヘラ削り	粗い　石英粒多い 5YR4/3　にぶい赤褐 良好	90％
6	土師器甑	口径　29.6 底径　9.8 器高　24.5	口縁部短く外反する	口縁部なで 体部縦方向ヘラ削り後磨き 内面磨き	細かい 5YR5/4　にぶい赤褐 良好	90％

第７表　１号住居跡出土土器観察表



1　7.5YR　1/3　黒褐　ローム粒を少し含む　しまり有り
2　7.5YR　4/3　褐　　ローム粒をやや多く含む　しまり有り
3　7.5YR　3/3　暗褐　ローム粒・ソフトロームブロックを含む　しまり有り

第25図　１号掘立柱建物跡

４　まとめ

居寒台遺跡は，これまで昭和55年度，平成３年度，平成８年度に４地点について発掘調査が実施されている。（第27図）これらについては平成８年度調査において本報告がなされている以外は，確認調査のみ，または本報告がなされていないため詳細については不明な部分が多いが，今回の調査との関わりが大きいので調査内容について若干触れたい。

昭和55年度調査

調査主体　千葉市遺跡調査会

発掘期間　昭和55年12月４日～昭和56年１月24日

調査面積　2,200㎡

検出遺構　古墳時代住居跡12軒　平安時代住居跡５軒　時期不明溝４条　土坑14基

平成３年度調査（１）

調査主体　（財）千葉市文化財調査協会

発掘期間　平成３年９月２日～９月12日（確認調査）　平成３年10月14日～平成４年１月31日（本調査）

調査面積　2,975.17㎡（確認調査）　1,650㎡（本調査）

検出遺構　旧石器時代石器集中区１ヶ所　古墳～平安時代住居跡30軒，掘立柱建物跡20棟　時期不明溝３条

平成３年度調査（２）

調査主体　千葉市教育委員会

発掘期間　平成４年３月19日

調査面積　614㎡（確認調査）

検出遺構　奈良・平安時代住居跡６軒　掘立柱建物跡２棟

平成８年度調査

調査主体　（財）千葉市文化財調査協会

発掘期間　平成８年８月５日～平成８年８月８日

調査面積　1,614㎡（確認調査）

検出遺構　古墳～平安時代住居跡４軒　土坑５基　溝１条

調査主体　居寒台遺跡発掘調査団

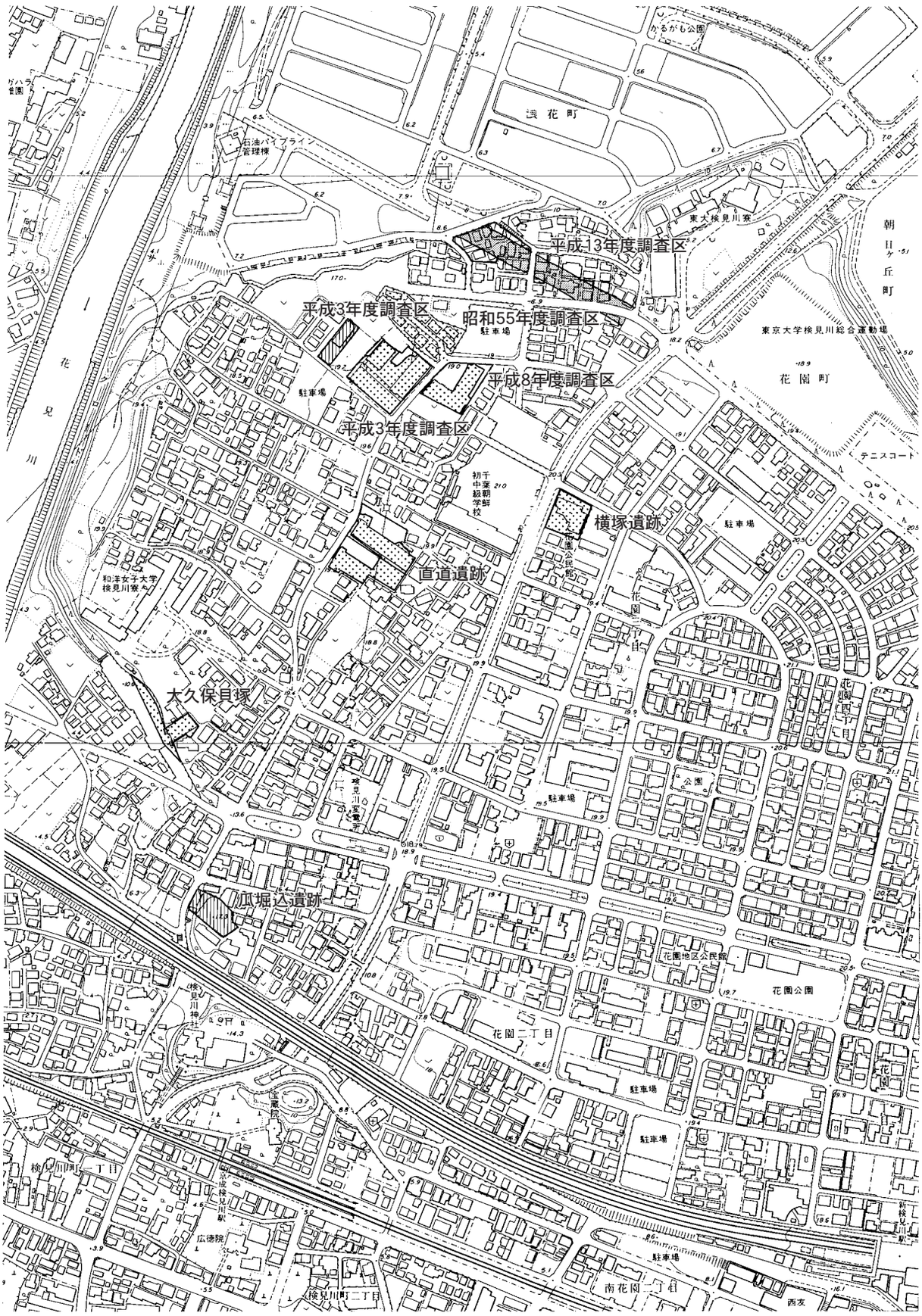
発掘期間　平成９年３月24日～平成９年４月21日

調査面積　1,088.4㎡（本調査）

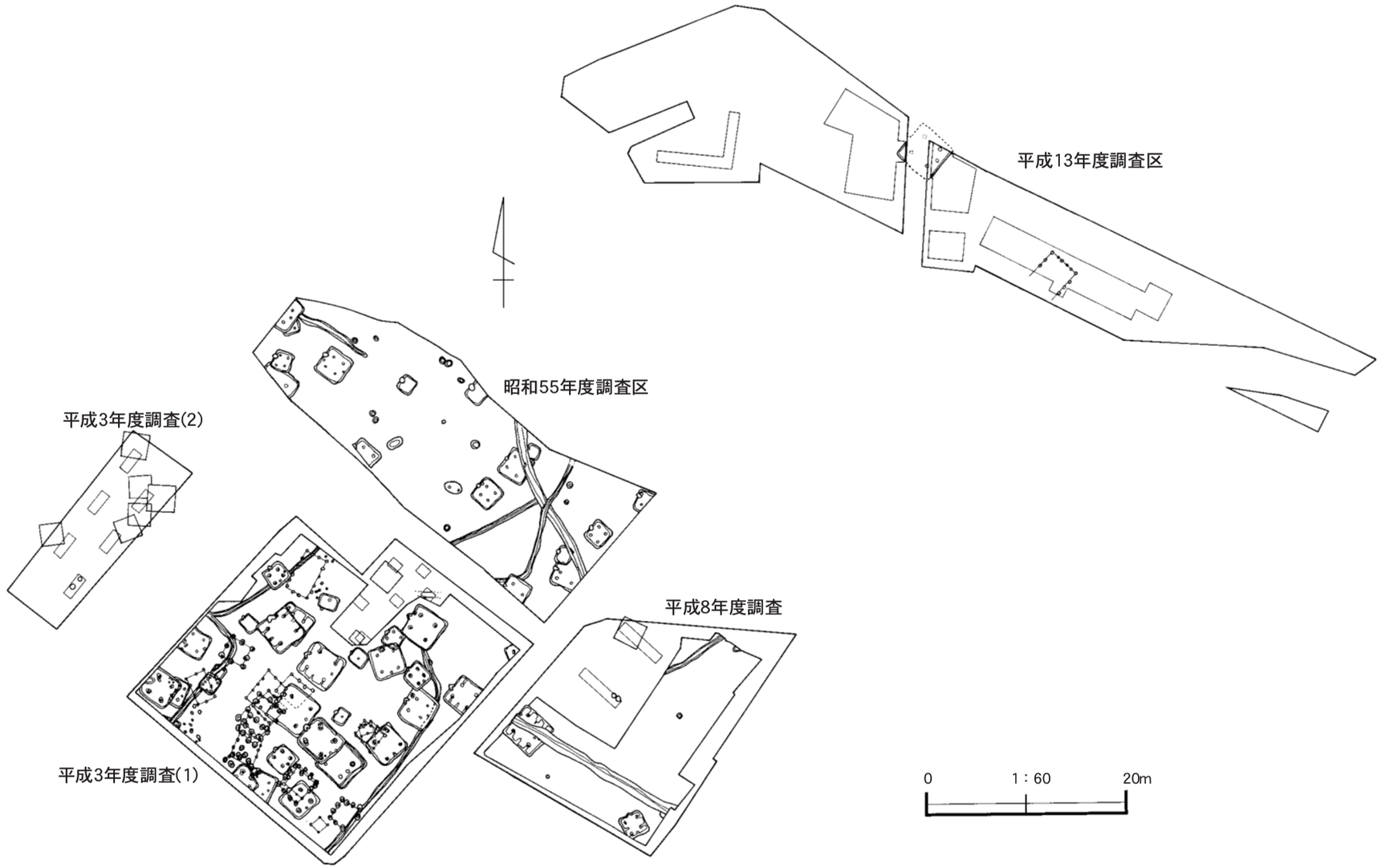
検出遺構　古墳時代住居跡１軒　奈良時代住居跡１軒　土坑１基　溝１条

縄文時代の遺構・遺物は，今までの調査では確認されていないようであり，今回の調査において後晩期の遺物が出土したことは，鶴牧支谷に望む台地北側縁辺部では該期の集落跡の存在が予想され，縄文時代後期とされる丸木舟が出土したことで有名な落合遺跡との関連性が伺える。

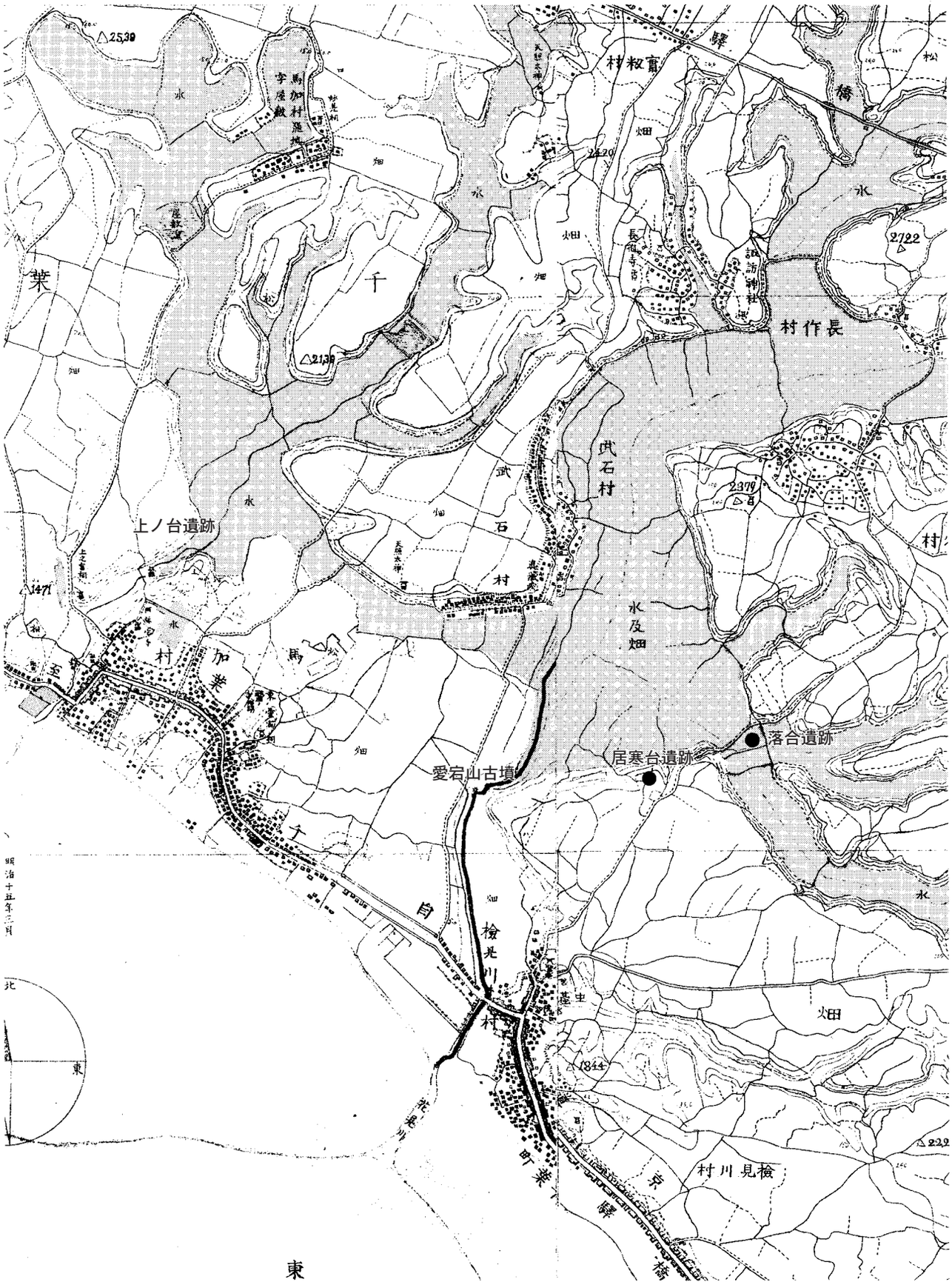
古墳時代後期～平安時代は，本遺跡の主体となると考えられる。今回の調査で台地の縁辺まで遺構の広がりが確認できた。過去の調査結果をみると平成３年度調査区は遺構の密度が濃く，その南約100ｍに位置する直道遺跡においても同様の遺構密度であることからこのあたりに集落の中心があったと



第26図　居寒台遺跡周辺地形図①（1／5,000）



第27図　居寒台遺跡遺構配置図



スクリーントーンは水田

第28図　居寒台遺跡周辺地形図②（1／20,000）

考えられ，また，居寒台遺跡の立地する台地では西側の大久保貝塚，南側縁辺部の瓜堀込遺跡においても遺構の存在が明らかとなっており，台地全体に集落が営まれていた可能性が高い。

周辺に目を向けると，幕張から検見川にかけて連なる砂州が存在するが，その形成は縄文時代後期と考えられており，砂州上には後期の方墳と考えられる愛宕山古墳がかつて存在していたことから，古墳時代後期には砂州は安定した状況にあったと推定される。その後背湿地の周囲に古墳時代中期には集落跡が確認されるようになり，後期には多くの集落跡が存在していることからこの地域の開発が上ノ台遺跡を中心として大規模に行われたと考えられる。しかし，上ノ台遺跡では6世紀前半から7世紀前半に大規模集落が営まれ，その後空白期間をおいて8世紀前半に住居跡が若干検出される程度である。それに対して居寒台遺跡（直道遺跡）では，多くの未調査部分があるので確定的ではないが，上ノ台遺跡より遅れて集落が形成され，上ノ台遺跡で空白となる7世紀半ば以降も奈良・平安時代に至るまで継続していることから，集落の存続期間が異なることが指摘できる。

出土遺物では，在地産と考えられるもの以外に埼玉県北部から群馬県平野部を中心に分布する有段口縁坏と同地域からもたらされたと考えられる甕・甑が出土したことが特徴としてあげられる。これらは未報告分にも少なからず認められるようである。

千葉県内では，東京湾岸沿いに多く分布しており，船橋市夏見台遺跡群，印内台遺跡群や上ノ台遺跡では坏・甕ともに出土しているが，花見川流域以南では千葉市谷津遺跡や椎名崎遺跡など千葉市南部までは有段口縁坏の出土は認められるが，甕はほとんど確認できないようである。時期は，おおむね6世紀後半から7世紀前半を中心とする。

また今回の調査では，ところによっては2ｍを超す砂層の存在が明らかになったが，過去の調査においても0.25～0.5ｍほどの厚さで確認されている。この砂層は今まで調査が行われたいずれの住居跡の覆土にも含まれず，旧表土層の上にみられることから平安時代以降に堆積したものと考えられ，広く東京湾岸沿いの台地上に堆積していることが知られている。堆積の原因は，風成による砂の飛散が考えられるが，その要因は何らかの理由で砂の供給源である砂州・砂浜が増加したため，あるいは気候の変化や砂州の耕地化が進むなどといった植生の変化により砂の飛散が容易になったためなどが考えられるが，いずれも推測の域を出ない。

参考文献

宮脇遺跡調査団　1973　宮脇－宮脇遺跡発掘調査報告－
千葉市史編纂委員会　1976 『千葉市史』　史料編　1
上ノ台遺跡調査団　千葉市教育委員会　1974 『千葉・上ノ台遺跡第１次調査概報』
千葉市教育委員会　1982 『千葉・上ノ台遺跡』
(財）千葉県文化財センター　1985 『千葉県文化財センター研究紀要』 9
(財）千葉県文化財センター　1985 『千葉市蓑輪遺跡』
杉原重夫　1988 「千葉市付近における縄文時代の海岸線の位置と古地理」『千葉市立加曽利貝塚博物館開館20周年特別講座講演集』　千葉市立加曽利貝塚博物館
田中広明　1991 「古墳時代後期の土師器生産と集落への供給－有段口縁坏の展開と在地社会の動態－」『埼玉考古学論集』（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団
千葉市教育委員会　1992 『千葉市の仏像』
千葉市史編纂委員会　1993 『絵にみる図でよむ千葉市図誌』上巻
飛田正美他　1995 『直道遺跡』（ 財) 千葉市文化財調査協会
平凡社　1996 『千葉県の地名』
千葉市教育委員会　1997 『埋蔵文化財調査（市内遺跡）報告書－平成８年度－』
居寒台遺跡発掘調査団　1997 『千葉県千葉市居寒台遺跡』
(財）千葉県史料研究財団編　1998 『千葉県の歴史』資料編中世１　考古資料
佐藤順一　1999 『千葉市御林遺跡』（ 財) 千葉市文化財調査協会
千葉市教育委員会　1999 『埋蔵文化財調査（市内遺跡）報告書－平成10年度－』
(財）千葉県文化財センター　1999 『千葉県埋蔵文化財分布地図（３）－千葉市・市原市・長生地区(改訂版）－　千葉県文化財センター調査報告第376集』
山王遺跡調査団　2000 『千葉県千葉市山王遺跡』
簗瀬裕一　2001 『千葉市源町遺跡群－高津辺田遺跡・南屋敷遺跡－』(財）千葉市文化財調査協会
古谷　渉　2002 『千葉市都町山王遺跡』（財）千葉市文化財調査協会

写　真　図　版

都町山王遺跡遠景

都町山王遺跡近景

発掘作業状況①

発掘作業状況②

台地上完掘状況

1号竪穴状遺跡

1号区画

遺物出土状況（第14図－34）

図版 2

1 号地下式坑

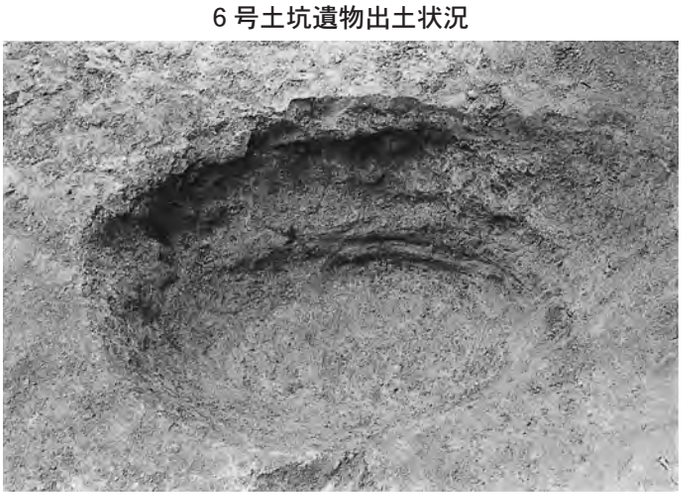
2 号地下式坑

3 号地下式坑

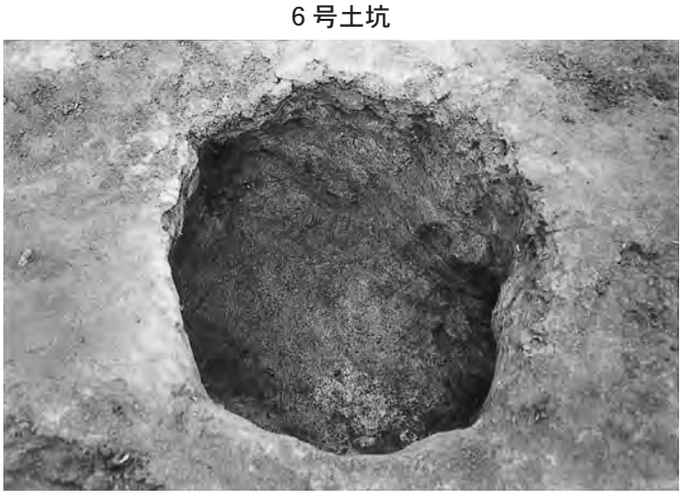
4 号地下式坑

6 号土坑遺物出土状況

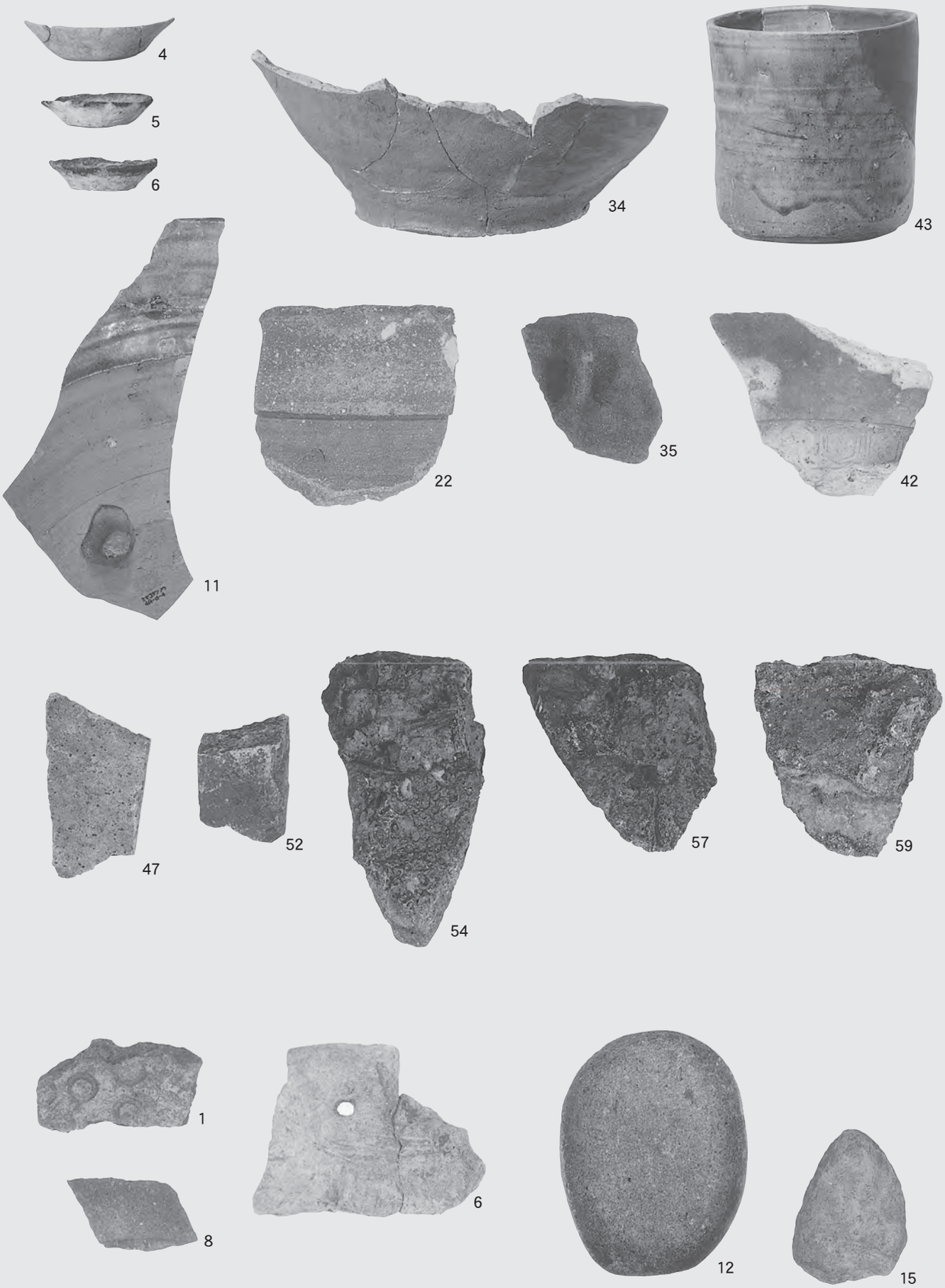
6 号土坑



8 号土坑



15 号土坑



都町山王遺跡出土遺物

図版 4

居寒台遺跡近景

発掘作業状況①

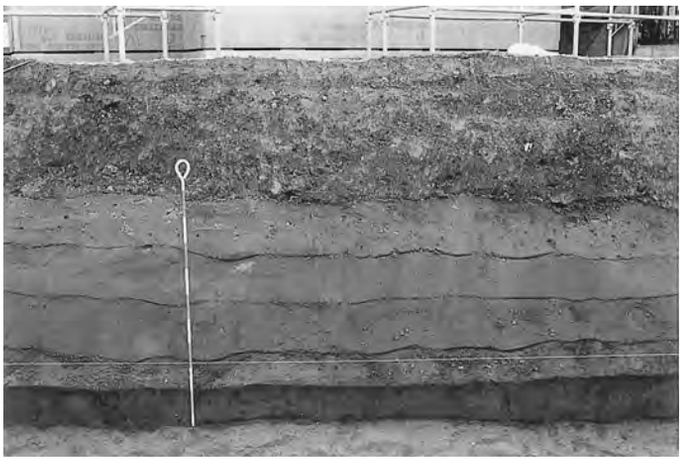
発掘作業状況②

1 号住居跡出土遺物①

1 号住居跡出土遺物②

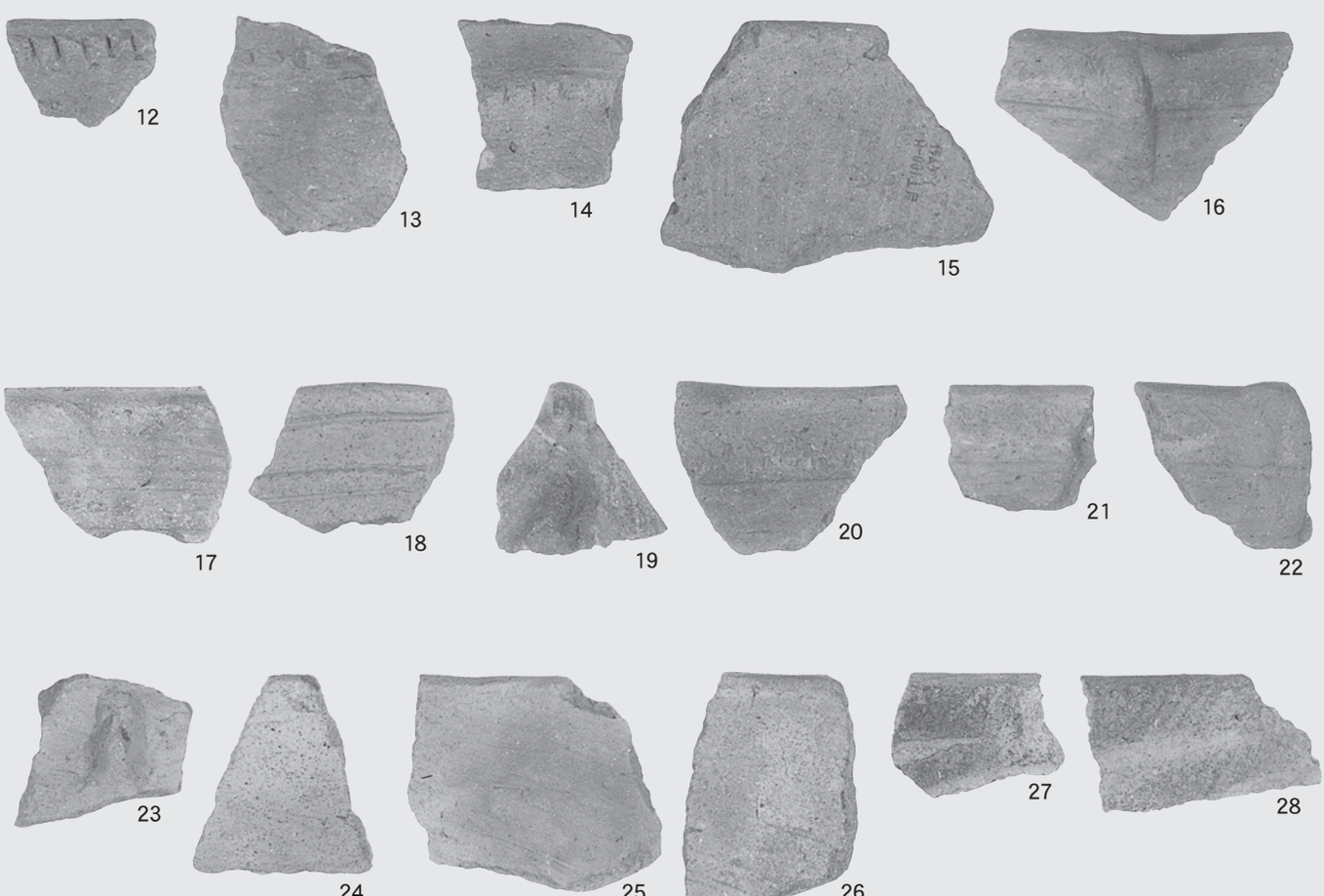
1 号住居跡

1 号掘立柱建物跡



土層堆積状況

居寒台遺跡　1 号住居跡出土遺物



調査区出土遺物

報　告　書　抄　録

ふりがな	ちばしみやこちょうさんのういせき・いさむだいいせき
書名	千葉市都町山王遺跡・居寒台遺跡
副書名	
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	白根義久
編集機関	財団法人千葉市教育振興財団　埋蔵文化財調査センター
所在地	〒260－0814　千葉市中央区南生実町1210　　TEL　043-266-5433
発行年月日	2003年３月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
都町山王遺跡（みやこちょうさんのういせき）	千葉市中央区都町1085番２他（ちばしちゅうおうくみやこちょう）	12104	中央区－９	３５°３６′３７″	１４０°９′２″	20010516～20010815	1,945㎡	道路建設
居寒台遺跡（いさむだいいせき）	千葉市花見川区浪花町16-30他（ちばしはなみがわくなにわちょう）	12104	花見川区－１３０	３５°３９′２３″	１４０°４′２１″	20011101～20011214	400/3,074㎡ 200㎡	道路建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
都町山王遺跡	包蔵地 屋敷跡	縄文時代・中世	屋敷跡１ヶ所 竪穴状遺構１基 地下式坑４基 土坑15基 区画１ヶ所 溝５条 ピット	旧石器（ナイフ・尖頭器） 縄文土器（前期・後期） 弥生土器（後期） 中世陶磁器（青磁碗，瀬戸皿・卸目付大皿・筒型容器・梅瓶・盤，常滑窯壺・甕片口鉢），在地土器（かわらけ・擂鉢・内耳土器） 砥石，炉壁，鉄滓，釘	
居寒台遺跡	集落跡	縄文時代，古墳～奈良・平安時代	竪穴住居跡１軒 掘立柱建物跡１棟	縄文土器（後晩期） 土師器・須恵器・軽石	

千葉市都町山王遺跡・居寒台遺跡
平成15年３月31日発行
編集・発行　千葉市教育委員会
〒260-8730
千葉市中央区問屋町１－35
財団法人　千葉市教育振興財団
埋蔵文化財調査センター
〒260-0814
千葉市中央区南生実町1210
TEL 043(266)5433
印　　刷　株式会社　太陽堂印刷所
〒260-0843
千葉市中央区末広1-4-27
TEL 043(222)1122